ISSN 0027-9153

月報

国立国会図書館

関西館10周年を迎えて　2

私の図書館巡歴と関西館

—史料に導かれた連鎖視点への歩み— 山室信一氏の講演から

世界図書館紀行 南京

2013.2
No.623

国立国会図書館利用案内

東京本館

所　在　地　〒100-8924　東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号　03(3581)2331
利用案内　03(3506)3300(音声サービス)
ホームページ　http://www.ndl.go.jp/
利用できる人　満18歳以上の方
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料　和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間　月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00
※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は 17:00までです。
資料請求受付★　月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00
※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。
即日複写受付　月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
後日郵送複写受付★　月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30
★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館　利用者サービス部　サービス運営課　03(3581)2331　内線25211

関西館

所　在　地　〒619-0287　京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号　0774(98)1200(音声サービス)
ホームページ　http://www.ndl.go.jp/
利用できる人　満18歳以上の方
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料　和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間　月～土曜日 10:00～18:00
資料請求受付★　月～土曜日 10:00～17:15
セルフ複写受付　月～土曜日 10:00～17:30
即日複写受付　月～土曜日 10:00～17:00
後日郵送複写受付★　月～土曜日 10:00～17:45
★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館　関西館　総務課　0774(98)1224［直通］

国際子ども図書館

所　在　地　〒110-0007　東京都台東区上野公園12-49
電話番号　03(3827)2053
利用案内　03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ　http://www.kodomo.go.jp/
利用できる人　どなたでも利用できます(ただし第一・第二資料室は満18歳以上の方)。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料　国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間　火～日曜日 9:30～17:00　※1階子どものへや、世界を知るへや、3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。
第一・第二資料室の利用時間　閲覧時間　火～土曜日 9:30～17:00　資料請求受付　火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間　即日複写受付　火～日曜日 10:00～16:00　後日郵送複写受付　火～日曜日 10:00～16:30
複写製品引渡し　火～日曜日 10:30～12:00　13:00～16:30

■見学のお申込み／国立国会図書館　国際子ども図書館　03(3827)2053［代表］

2 February

CONTENTS

02 皇城実測図　明治初期の皇居
今月の一冊　国立国会図書館の蔵書から

04 関西館10周年を迎えて　2

05 私の図書館巡歴と関西館
―史料に導かれた連鎖視点への歩み― 山室信一氏の講演から

14 シリーズ　雑誌の七変化
1.雑誌の創刊
2.雑誌の改題

19 世界図書館紀行　南京

26 典拠でつながる情報検索の世界

30 ことばの壁をこえる典拠 ―バーチャル国際典拠ファイル（VIAF）への参加

13 館内スコープ
インフォメーション／一期一会

35 本屋にない本
○『横浜華僑の記憶　横浜華僑口述歴史記録集』
○『「満洲」の図書館　資料展示図録』
○『終戦時新京蔵書の行方　科学研究費補助金（基盤研究C）平成22年度成果課題 戦前期「外地」で活動した図書館員に関する総合的研究　資料展示図録』

38 NDL NEWS
○平成24年度レファレンス研修

39 お知らせ
○平成24年度利用者アンケートの結果を公表しました
○東日本大震災アーカイブ公開記念シンポジウム「東日本大震災の記録をのこす意志、つたえる努力」
○国立国会図書館インターネット資料収集保存事業（WARP）をリニューアル公開しました
○オンライン資料制度収集説明会（第2回）
○デジタル化資料活用研修会のご案内
○平成24年度図書館及び図書館情報学に関する調査研究「日本の図書館におけるレファレンスサービスの課題と展望」報告会
○第9回レファレンス協同データベース事業フォーラム
○関西館小展示（第13回）「花ひらく少女歌劇の世界」
○国際子ども図書館展示会「日本の子どもの文学ー国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」のご案内
○新刊案内　国立国会図書館の編集・刊行物

今月の一冊 February

国立国会図書館の蔵書から

皇城実測図　明治初期の皇居

津田　深雪

本図は明治初期の皇居内の実測図である。写真3の吹上御苑内の紅葉山付近やお壕際などには、等高線が細かく刻まれているのが見える。

「旧皇城本丸図」（写真1）「旧皇城西丸図」（写真4）「旧皇城内吹上御苑之図」（写真3）「旧皇城竹橋内之図」（写真2）の4図に加え、「測截面図」（写真6）をあわせた5枚組みの地図で、最も大きな吹上御苑の図は1辺261cmもある。縮尺表示には単位がなく尺貫法によるものと見られ、おおよそ1:500の詳細な実測図である。手書きの彩色図で、特に西丸の図は森の緑と水の青が鮮明である。皇居の西側には御鷹所、御写真所、御馬場などの文字があり、また吹上御苑内に見える瀧見御茶屋は、明治6年の皇城炎上時に、明治天皇と皇后両陛下が一時避難されたと記録に残されている。

4枚の地図には、A-B、C-D’などの点線が引かれている（写真4、5）。これが「測截面図」（写真6、7）と対応しており、皇居内の各地点の地形の高低差を読み取ることができる。

明治元年、江戸城は東京城と改称され、さらに東京奠都（てんと）にともなって皇城と改称された。本丸・西の丸・吹上など旧江戸城内郭を皇居とし、諸官庁を皇居周辺に集中させる計画が進められたが、明治6年5月5日、皇城は火事で炎上する。明治宮殿が完成する明治21年までの間、赤坂離宮が仮の皇居となった。

この地図が作成されたのは、皇城炎上から明治宮殿建造までの明治前期と見られる。地図に作成者の記録はなく、折りたたんだ表紙には「陸軍文庫」の印記が見える。

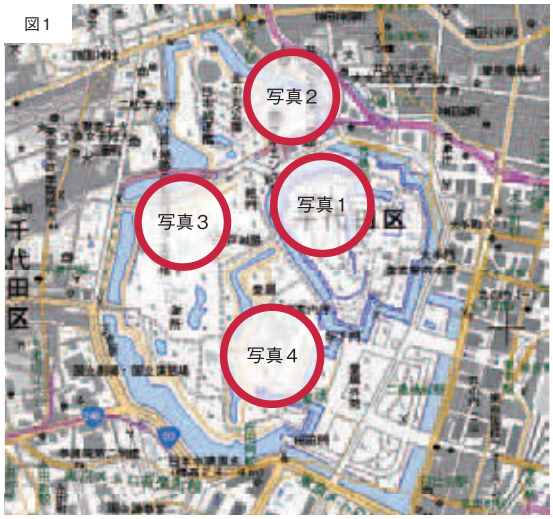
本丸図には二の丸・三の丸まで含まれ、軍馬局の厩、第五局や鎮台所用の番所など、陸軍省の施設が多く記録されている。軍馬局は明治7年から19年まで置かれた組織で、第五局とは明治6年から12年の間会計局が改称されたものである。富士見台には明治8年の組織改正で設置された砲兵本廠の文字も見え、これらから考えるに、この地図が表しているのは明治8年から12年ごろの内容と思われる。

現在、国内の測量・地形図作成を担当する国土地理院は、明治21年発足の参謀本部陸地測量部の流れをくむ。それ以前の明治初期においては、地図の作成は内務省・工部省・陸軍省などの機関で独自に計画され、それぞれイギリス・フランス・アメリカなどから招いた測量技師の指導のもと実施されていた。明治2年に民部省内に設けられた戸籍地図掛が地理司となり、民部省が廃止されると大蔵省を経て明治7年に創建された内務省地理寮に移った。工部省は明治4年に測量司を設置、イギリス人の指導のもと三角測量を開始したが、これも明治7年に内務省へと移管された。

一方、明治4年に兵部省参謀局に設けられた間諜隊は「平時においては地理の偵察・調査と地図の編集作成を行う」ことを任務としたが、これが後の陸軍参謀本部陸地測量部につながる。これらの地図作成機関の統廃合を経て、明治17年には、陸地の測量と地図作成については陸軍が統一してドイツの測量方式で行うこととなった。

皇城の再建は度重なる計画変更や西南戦争の勃発などによって遅れたが、17年に着工、21年10月に竣工し、22年1月11日に明治天皇・皇后両陛下が遷御された。これが明治宮殿であり、宮城と称されたが、第二次大戦後にその称が廃され、現在の皇居となった。

（つだ　みゆき　収集書誌部収集・書誌調整課）



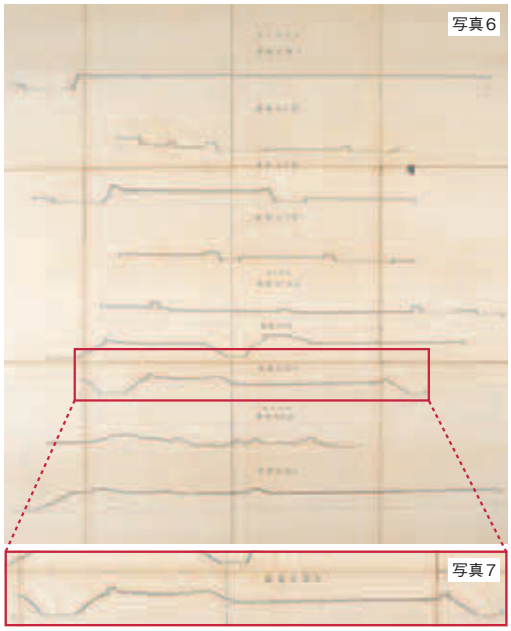


写真1 旧皇城本丸図 部分
写真2 旧皇城竹橋内之図 部分
写真3 旧皇城内吹上御苑之図 部分
右下の緑色枠内は「瀧見御茶屋」の部分を拡大
写真4 旧皇城西丸図 部分
写真5は写真4のA-B部分を拡大したもの
写真6 測截面図
写真7は写真6のA-B部分を拡大したもので、写真5と対応しておりA-Bの高低差がわかる
写真8『皇城実測図』表紙
図1 現在の皇居周辺の地図（この背景地図等データは、国土地理院の電子国土Webシステムから配信されたものを利用）

●参考文献
『東京市史稿　皇城篇』東京市 編　臨川書店 1973-1974
『測量・地図百年史』測量・地図百年史編集委員会 編　国土地理院 1970

『皇城實測圖』［出版者不明］［1870年代］地図5枚　133×129cm～133×261cm（折りたたみ44cm）＜請求記号　YG913-2438＞　※東京本館所蔵

関西館10周年を迎えて　2

平成24年10月、国立国会図書館関西館は開館10周年を迎えました。これを記念して、10月以降、各種の記念イベントが開催されました。その内容を3回連続でお知らせします。

今回は、10月6日に行われました、京都大学人文科学研究所教授の山室信一氏の講演会の様子を皆様にご紹介します。

山室信一氏

私の図書館巡歴と関西館

－史料に導かれた連鎖視点への歩み－ 山室信一氏の講演から

●国立国会図書館との出会い

私は大学卒業後に衆議院法制局に就職しました。衆議院法制局は、政党や衆議院議員などからの依頼を受け、議員立法の立案や照会への対応を行う機関であり、職員は各国の事情を調べるために国立国会図書館（写真1）を利用できます。国立国会図書館は名前に「国会」とあるとおり、国会における立法活動を補佐するとともに、そのための資料となる図書や雑誌を所蔵するという重要な役割を担っています。当時、私は職務上、国立国会図書館の書庫に入庫して、そこで図書を手にとって見られるという環境におりました。

写真1　国立国会図書館東京本館

その中で、次第に私は法律を作る担い手の意味を考えるようになり、井上毅（いのうえこわし）という人物に関心を持つようになりました。井上は明治憲法や教育勅語の起草に関わるなど日本の近代法制を構築した人物で、「明治国家のグランドデザイナー」の役割を果たした人だともいわれております。

もう一つ、研究に心が向うように

なったきっかけは、私が就職してすぐに起きたロッキード事件です。このため、法制局では情報公開法などの再発防止法案を起案しましたが、結局、これらの法案は成立しませんでした。なぜ、こうした事が起こるのか。当時の衆議院法制局長から様々な問題をお聞きする機会もあって、次第に日本政治の成り立ちを勉強する必要性を痛感し、東京大学社会科学研究所で政治・法律・経済の関連性を研究することを考えました。その時の一つの記憶があります。

国立国会図書館東京本館の図書カウンターの上には「真理がわれらを自由にする」（写真2）という言葉が示されていますが、当時、この言葉を前にして、日本の政治についての真理を知れば、自分は自由になることができるのか、と自問しながら、研究の道に進むことを決めました。

写真２　国立国会図書館東京本館図書カウンター上部

写真３　東京大学明治新聞雑誌文庫

この言葉は、戦前の政治では国民が真相を知らなかった、あるいは、知らされなかったために悲惨な結果を生んだことを反省し、立法や施政の基本となる資料を集積する図書館を作ることによって国民と議員が真理を知るための手立てを持っておくことが重要であることを訴えるものと、私は受けとめています。

●明治新聞雑誌文庫で

東京大学社会科学研究所に移ってからは、井上毅など明治の官僚たちの活動を調べるために東京大学の明治新聞雑誌文庫（写真3）に通いました。明治新聞雑誌文庫を作ったのは、宮武外骨（みやたけがいこつ）という人です。宮武は関東大震災の被害により、明治期の新聞雑誌がほとんど消失してしまった中で、日本の近代を歴史的に捉え直すためには史料としての新聞や雑誌を収集することが必要だという使命感を持ちます。宮武は北海道から九州に至るまで歩き回って、各地に遺された新聞や雑誌を集めていきました。

私が明治新聞雑誌文庫に通う中で見えてきたことは次のようなことです。明治期に欧米で学んだ日本人留学生や官僚が帰国して、欧米の国家制度や文化を日本に移し替えようとします。その際、どの国をモデルとするかは留学生にとっては死活問題でした。なぜなら、語学から始まって十数年かけて留学して学んだことが日本で採用されなければ、その知識は無駄になりかねないからです。そこで留学生たちは、自らが学んだ国の法政や文化についての知識を国民に広く知らせるために演説会を開催し、同時に、演説会の成果や自らの意見を広めるために雑誌を刊行します。しかし、演

説会の開催は不定期で、不特定多数の人が集まるのにとどまったため、特定の場所に人が集まり持続性をもって学んでいく施設を必要として、さらに私立の学校を設立しました。

日本では大学は、京都帝国大学ができるまでは東京帝国大学一校だけで、それ以外はすべて私立の法律学校や各種学校でした。例えば、フランス法を学んだ仏学派は、和仏法律学校（現、法政大学）、明治法律学校（現、明治大学）、関西法律学校（現、関西大学）などを創り、イギリス法を学んだ英学派は、東京専門学校（現、早稲田大学）や英吉利法律学校（現、中央大学）などを、またアメリカに学んだ人々は専修学校（現、専修大学）を創設しました。こうした動きを通して、欧米の法政や学知を日本に継受することが図られていきます。さらに、留学した国を軸として、嚶鳴社（おうめいしゃ）や共存同衆（きょうそんどうしゅう）などの結社が創られていき、それぞれ理想とする国家体制を創るために活動し、これらが自由党や改進党などの政党に発展していきました。

一方、明治新聞雑誌文庫等で私が研究の合間に息抜きで見ていたのが、明治期に刊行された速記本です。日本に速記法が入ってきたのは国会で議事録を作るためですが、これが三遊亭圓朝（さんゆうていえんちょう）や松林伯円（しょうりんはくえん）などの落語家や講談師の噺を活字化することにも使われました。彼らは、噺の中にヨーロッパの法律や事情の紹介をうまく取り入れていました。また、今起こっているニュースにコメントをつけながら、分かりやすく社会生活に必要な知識を提供しました。例えば三遊亭圓朝は『塩原多助一代記（しおばらたすけいちだいき）』の中で、塩原多助が炭屋に奉公して、落ちていた屑の炭を集めて売って立身した事歴などを紹介することを通じて、資本主義社会で生きていく倫理や知恵とは何かを教えていました。その他、契約書がもつ意味なども噺に織り込まれたりしています。

このように、水平的にヨーロッパから日本に留学生が持ってきた思想や文化を、垂直的に大衆演芸などを通じて一般の国民につなげていく流れがあったことが明らかになってきました。こうした思想や文化の空間を越えた繋がりに着目する視角を私は「思想連鎖」あるいは「連鎖視点」と呼んでいますが、その着想を得たのは明治新聞雑誌文庫の豊富な史料からでした。

●東北大学狩野文庫へ

その後、東北大学文学部附属日本文化研究施設（現、東北大学東北アジア研究センター）に移りましたが、東北大学では、狩野文庫との出会いという幸運に恵まれました。狩野文庫は東北大学附属図書館（写真4）の中に収蔵されているコレクションです。狩野文庫を作ったのは狩野亨吉（かのうこうきち）で、夏目漱石が亡くなった時に友人代表で弔辞を読ん

写真4　東北大学附属図書館

だ人物です。42歳で京都帝国大学の文科大学（現、京都大学文学部）の総長になりますが、44歳で大学を去った後は、78歳に亡くなるまで古書史料の収集と読解に専念しました。彼は、日本の近代が欧米を摂取することで生まれたとするなら、それ以前に真の日本はなかったのかを知りたいと考えて、近代以前の日本や中国に関する書籍や史料を、書画の鑑定などによって得たお金を費やして収集しました。その中で江戸時代の独創的思想家である安藤昌益（あんどうしょうえき）を発見することになります。

ところで、東北大学附属図書館には漱石文庫というコレクションもあり、漱石の貴重な手跡本などが残されています。これは漱石の弟子である小宮豊隆（こみやとよたか）が、東京大空襲の直前に東京から東北に移したため、難を逃れて消失せずに遺ったものです。国立国会図書館には東京本館と関西館がありますが、これは資料を分散配置して、災害によりすべてが一度に消失するのを避けて保存を図るという点で、大きな意義があります。

当時の私は、明治期の学会や結社が刊行した雑誌や留学生が翻訳した書物を調査するために全国の大学図書館などを順に訪問していました。図書館で目録カードをめくって史料を検索するのですが、雑誌は目録カードが存在しないことが多いため、書庫に入って雑誌を一点ずつ探していきました。探し出した雑誌を一号から全部そろえた上で、出版社にマイクロフィルム版として製品化してもらうこともありました。

また当時、京都大学の島田虔次（しまだけんじ）先生と、後に東京大学に移られた佐藤慎一先生との貴重な出会いがありました。中国人が中江兆民（なかえちょうみん）の著作を『共和原理民約論』として翻訳していたことを自著で注記したところ、島田虔次先生から、この翻訳の存在に対して驚きの声が寄せられ、初めてその重要性を知ることができました。また、佐藤慎一先生とは、東アジアの近代化にとって進化論が重要な意味を持っていると考えて、日本、中国、韓国の進化論の比較研究を共同で始めました。共同研究において、佐藤先生が日本に亡命していた中国人である梁啓超（りょうけいちょう）が刊行していた雑誌『新民叢報（しんみんそうほう）』などに関して論じられました。それらを調べていますと、当時の中国では国境や民族の概念がなかったにもかかわらず中国の領土が赤く塗られていたり、福沢諭吉や西郷隆盛などの肖像が載せられていたり、日本と中国の思想連鎖の重要性に気づくことになりました。

このように欧米から日本に継受された思想や文化は、文字を読める人には雑誌や翻訳書により、文字を読めない人には講談などの大衆演芸によって浸透していったのではないか、というのがそれまでの私の仮説でしたが、ここにアジアという問題が加わってきました。すなわち、中国や韓国などから来日した留学生たちが、これらの雑誌を母国語に翻訳したことから、それぞれの国に受け入れられていき、欧米や日本の思想や文化が日本を結節環として中国、韓国、ベトナム、タイ、ビルマ、インド等に広がっていく流れがあることに着目していくことになりました。

●アメリカ東海岸から見るアジア

こうした思想の連鎖を考えているときにアメリカ合衆国のハーバード燕京（イェンチン）研究所（写真5）で研究する機会が与えられました。ここの図書館で驚いたのは、日本の史料のみならず、中国、朝鮮、ベ

写真５　ハーバード燕京研究所

写真６　ハーバード大学ワイドナー図書館

トナム等の東アジアの史料を一堂に所蔵していることです。これは、アメリカ合衆国では議会図書館のアジア・コレクションに次ぐ規模でした。日本では、東洋文庫、東京大学東洋文化研究所、京都大学人文科学研究所等には中国の史料はありますが、朝鮮やベトナムなどの史料は少ないのが実態です。現在、これらの国々の史料が国立国会図書館関西館アジア情報室には所蔵されていますから、きわめて貴重な存在だと思います。

ハーバード大学の多くの図書館のうち、もっとも有名なのがワイドナー図書館（写真６）です。図書館の大きさは全米第三位で、書架を直線に並べると長さは約80kmに達するそうです。ここでは、おもに進化論関係の史料を調査しました。

ハーバード大学の講義の中で興味を引いたのは、科目のタイトルが「日本史」や「中国史」ではなく「東アジア文明」であることでした。タイトルのとおり、日本や中国や韓国などの関連性を重視するものであり、日本では一国史の視点に留まっていることの問題点に気付くことができました。

また、ボストンの北にあるセイラムの街に史料調査に行きました。17世紀に魔女裁判が起こった街で、魔女グッズでも有名でした。この街にはピーボディ・エセックス博物館があり、日本で進化論を広めたエドワード・モースが初代館長を務めておりました。ここには、エドワード・モースが集めた日本や朝鮮の民具等が残っております。狩野文庫を創った狩野亨吉は、若い時に日本で父親とともにエドワード・モースの講演を聞いており、一時期、進化論に非常に強い影響を受けていたことなどの繋がりにも興味深いものがあります。

さらに、ボストンの南にあるフェアヘブンの街にも行きました。ここはジョン万次郎が滞在したところで、ジョン万次郎関係の遺品を所蔵しているミリセント図書館があり、日本関係の史料も所蔵しています。また、この地では日米交流活動が現在でも続けられています。

●帰国して

これまでの調査で気付いたことを踏まえて、帰国後は特に中国語への翻訳本を求めて東京都立図書館の実藤恵秀（さねとうけいしゅう）文庫や井上哲次郎文庫などの史料を探しました。

中国では官僚になるための試験であった科挙が廃止されると、認定基準として新たに外国の大学などの学歴を採用したため、中国から距離的に近く、また漢字も使える日本に、多数の留学生が来日することになりました。日本の教育の現場においては、日本語を理解する留学生が横について通訳を通じた授業を行うことによって語学修得の時間を節約する速成の教育も行なわれました。もちろん、日本語を修得した留学生も少なくありません。留学生たちは、講義録を自分で咀嚼して著作を刊行したり、教科書の翻訳や雑誌の刊行などに力を尽くしました。さらに、当時の日本の最新の法律すべての翻訳を行いました。また、帰国後には政府の立法機関や省の諮議局などで法制整備に従事したことによって、清朝末期から中華民国初期の中国の様々な法律が日本法に準拠する一因ともなりました。

同じように、韓国からの留学生も母国語で雑誌の刊行を行いました。例えば『大韓留学生会学報』や『大韓興学報』などは韓国で復刻されており、国立国会図書館関西館にも所蔵されています[1]。

この他、日本の旧制の高等商業学校[2]には、中国、韓国からの留学生のための特設学科が当時設けられていましたし、商業活動をその地で行う必要性もあって、漢文の講義録などが図書館や資料室の片隅に残されていたため、貴重な史料が埋もれていることが少なくありませんでした。

●中国・台湾そして韓国で

以上述べましたことからお分かりのように、このような連鎖の実態を調査することは日本国内だけでは不十分ですから、中国、台湾、韓国で調査を行いました。

中国では、北京にある中国国家図書館（写真7）

写真7　中国国家図書館

写真8　上海図書館

をよく利用しました。かつては史料を出納してくれないことも多かったのですが、鄧小平による改革・開放以後は出納してくれるだけでなく、複写なども可能になりました。最近は上海図書館（写真8）も整備されて利用が便利になり、ここで法政大学の漢文講義録なども発見しました。

台湾では台北、台中、台南の三か所で調査を行い、台北では台湾大学図書館、国家図書館、国立中央図書館台湾分館を利用していますが、現在では日本からインターネットでアクセスできる史料もあります。

韓国には大学図書館の他、国立中央図書館と国立デジタル図書館があり、国立デジタル図書館ができてからは、古い史料の複写サービスが便利になりました。

ところで、韓国では韓国学を再構築するために、国が多額の予算を費やして、拠点大学などで史料の収集を重点的に行ってきています。残念ながら、日本はそういう環境にはないので、書籍を出版したら国立国会図書館に納本することを地道に積み重ねていってほしいと願っています。

こうした研究を重ねるうちに、これまでは、近代日本はヨーロッパからの知識をもとにして、例えば江戸時代であれば蘭学や洋学をもとにして近代国家を作ったと考えていたのですが、実は中国を経由した学問も重要だと気付くようになりました。例えば『海国図志（かいこくずし）』は、世界各国の歴史や政情などを紹介した本ですが、横井小楠（よこいしょうなん）や佐久間象山（さくましょうざん）らの幕末の思想家はこれら中国経由の万国史を通じて世界の実態を知り、開国論に転換していったのです。つまり、「思想連鎖」を考える場合に、欧米から日本各地へ水平に、そして大衆へ垂直に、という流れだけではなくて、欧米から中国を経由して日本へ、さらに、日本からアジアへという流れが重要であることが分かるようになったということです。

●国立国会図書館関西館について

さて、国立国会図書館には「集める、のこす、創り出す」という機能があります。これまで図書や資料を集めることとのこすことの重要性について述べました。史料を集めることに、宮武外骨が執念を燃やし、狩野亨吉が一生を費やしたのは、「集める、のこす」ことが、通念となった誤りを正し、新たな真理を生み出す土台になると考えたからであったためであろうと私には思えます。

これまで私は史料を求めて、自ら足を使って日本と世界各地をまわってきました。しかし現在は、例えば明治期や大正期の日本の図書の多くは、インターネットで「近代デジタルライブラリー」[3]を使えば、自宅で読むこともコピーを取ることもできます。かつて明治期の雑誌や翻訳書のマイクロフィルム版による集成シリーズを作成したときは、出版社の方が全国に一冊しかないような史料がある場所まで行き、カメラで1枚ずつ撮影されていましたが、こういったマイクロフィルム版の史料も今は国立国会図書館に集まっています。非常に便利な時代になりました。現在は中国や韓国

1 『大韓留學生會學報』［複製版］韓國學文獻研究所 編　서울（ソウル）　亞細亞文化社　1978年　＜請求記号 Z23-AK43＞
『大韓興學報』［複製版］韓國學文獻研究所 編　서울（ソウル）　亞細亞文化社　1978年　＜請求記号 Z23-AK44＞
2 日本の旧制の実業専門学校の一種。商業に関する専門学科を習得するための学校。東京高等商業学校（現、一橋大学）や神戸高等商業学校（現、神戸大学）などがあった。
3 国立国会図書館近代デジタルライブラリー（http://kindai.ndl.go.jp/）

のみならず、フィリピン、インドネシア等の様々な情報に、国立国会図書館関西館（写真9）のアジア情報室を通じてアクセスできます。このような新しい環境で、若い世代には、新しい研究の方法と世界に対する見方を創ってほしいと思います。

私は研究を続けていくためには三つの「カン」が重要であると思います。研究対象に「関心」を持ち、そこに見出した新たな発見に「感動」し、著作や史料を遺し、啓発を与えてくれた先人たちに「感謝」の心を持つことです。私がこれまで研究を続けることができたのは、明治新聞雑誌文庫を創った宮武外骨や狩野文庫を創った狩野亨吉が、それ自体、報われることもない「集める、のこす」という、それこそ地を這うような作業に執念を燃やし、一生を費やしてくれたおかげです。若い世代の方々には、これまでの成果を土台として、さらに遠くへ視線を向け、新たな真理を発見していってほしいと思います。真理と自由は与えられるものではなく、自らの手で獲得する以外にないはずですから。

（編集　関西館10周年記念行事担当）

【講師プロフィール】

山室（やまむろ）　信一（しんいち）
京都大学人文科学研究所　教授

1998年から現職
2009年　紫綬褒章受章

おもな著作

- ●『憲法9条の思想水脈』（朝日新聞社 2007）司馬遼太郎賞
- ●『思想課題としてのアジアー基軸・連鎖・投企』（岩波書店 2001）アジア・太平洋賞特別賞
- ●『キメラー満洲国の肖像』（中央公論社 1993）吉野作造賞
- ●『法制官僚の時代ー国家の設計と知の歴程』（木鐸社 1984）毎日出版文化賞

写真9　国立国会図書館関西館

インフォメーション／一期一会

インフォメーションは昨年1月のリニューアルに伴い、旧総合案内の業務を引き継ぎ、新たなスタートを切りました。

インフォメーションにおける一番基本的な業務は、利用者の方の問い合わせに回答することです。職業や国籍、利用目的、老若男女問わず、いろんな方が当館を利用しており、利用者の方が十人十色であれば、問い合わせの内容も実にさまざまです。資料請求の方法などの基本的なことから、新聞記事の検索方法、市場動向の調べ方、納本制度の仕組み……と、挙げていったらきりがありません。ごく稀に、「何十年ぶりかに来館したが……」という前置きの下、入館前どころか生まれてすらいなかった頃の館内のことを聞かれ、一瞬頭の中が真っ白になるようなこともあります。カウンターに出始めの頃に、そういったイレギュラーな質問ばかりされたらどうしよう、と戦々恐々としていたことが、今では遠い昔のように思えます。

インフォメーションでは、専門的な知識も必要ですが、館の内外を問わない、幅広い情報をおさえておくことも重要です。ただ単に一問一答の質問に回答できるだけでなく、会話の中から利用者の方が本当に欲している情報を引き出すことで、よりよい資料やデータベースの紹介、適切な専門室の案内などが可能となり、また、質問から回答までの一連の流れも、よりスムーズなものとなります。残念ながら私は、館内経験がまだまだ浅く、世間の流行などにも疎いので、日々苦労しています。

カウンターは1人体制なので、矢継ぎ早に問い合わせが来て、てんてこ舞いになる日もあります。そういった日の終わりにはどっと疲れが出ますが、そんな時でも、利用者の方から帰り際に、「先ほどはありがとう」と何気ない一言をいただくと、また明日への活力が湧いてきます。

利用者の方の中には、常連の方もいらっしゃれば、本当に一度限りの利用の方もいらっしゃいます。「お手洗いはどちらですか」「こちらの裏手にあります」「ありがとうございます」そんな二言三言を交わし、もう二度と会うことがない方もいらっしゃるでしょう。利用案内はまさに一期一会。これからも一瞬一瞬を大切にして、ご案内していきたいと思います。

（サービス運営課総合案内係　PHandU）

シリーズ

雑誌の七変化

1．雑誌の創刊

2．雑誌の改題

「生まれました」

「名前が変わりました」

「大きくなりました」

「居候でしたが、独立しました」

「一緒になりました」

「卒業しました」

「もうだめかと思いましたが、復活しました」

……

人のことかと思いきや、これは雑誌のこと。雑誌でも人と同じようなことが起こるのです。国立国会図書館の雑誌担当職員は、日々変わりゆく雑誌とともに働いています。

出版社や官公庁などから国立国会図書館に届いた雑誌は、収集部門と書誌作成部門で、検品、書誌データの作成、雑誌記事索引の採録、バーコード貼付などを行ったのち、おもに東京本館の新館書庫に収められます（国立国会図書館所蔵雑誌資料については、本誌599（2011年2月）号を参照）。

書架に並ぶ様々な雑誌を見れば、写真2、3の時刻表のように、同じような内容で、地道にコツコツと500号、1000号と通号を重ねてゆく雑誌もあれば、途中でタイトルが変わったり、1つの雑誌から新たに別の雑誌が分かれて生まれたり、はたまた他の雑誌に吸収合併されたり、惜しまれつつ休廃刊してゆく雑誌もあります。それも、休刊号と銘打って休刊とするもの、いつの間にかひっそりと廃刊していたものなど、終わり方も多種多様です。

写真4、5をご覧ください。一見、温泉や飲食店のガイドブックのように見えます。しかし、表紙をじっくり見てみると、写真6のタウン情報誌

『ながさきプレス』の増刊号であることがわかります。この雑誌は、本誌とは別に、さまざまなジャンルの増刊号を発行しているのです。皆さんが普段何気なくご覧になっている雑誌も、図書館で提供し保存する側から見ると、さまざまな特徴があることがわかります。

また、時代を追って見れば、戦時中には雑誌の統廃合が行われ、戦後は質の悪い紙を使って相次いで復刊されたり、高度成長に伴って刊行頻度が増えたり、男性誌から女性誌が新たに生まれたり……まさに雑誌は、移りゆく世相とともにあります。

このシリーズでは、雑誌資料の「七変化」を、1 創刊、2 改題、3 分離・派生、4 合併、5 休廃刊、6 復刊、7 その他の変更の7つのテーマで、3回に分けてご紹介します。

写真1 書庫に並ぶ時刻表

写真2 『JR時刻表』交通新聞社 月刊 ＜請求記号 Z5-345＞ 平成16年12月1日に発行された42巻12号通巻500号の表紙。

写真3 『JTB時刻表』JTBパブリッシング 月刊 ＜請求記号 Z5-351＞ 2009年5月1日に発行された第85巻第5号通巻1000号の表紙。Illustration by Eiji Mitooka +Don Design Associates

写真4

写真5

写真4 『ながさきプレス』
〜 ながさきプレス 月刊
写真6 ＜請求記号 Z71-T476＞
写真4は平成16（2004）年10月1日発行の臨時増刊（通巻228号）の表紙。表紙の上の画像は巻号表示の部分を拡大したもの。
写真5は2007年2月1日発行の臨時増刊（通巻262号）の表紙。表紙の上の画像は巻号表示の部分を拡大したもの。
写真6は平成24年12月1日発行の2012年12月号通巻352号で、通常の月刊号の表紙。

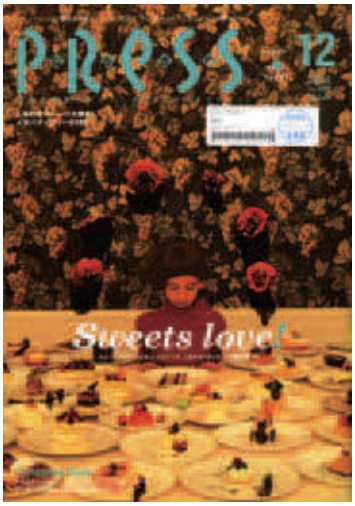


写真6

1.雑誌の創刊

創刊号の不思議

創刊とは新しい雑誌を刊行すること、その最初の号が創刊号、そうイメージされる人も多いのではないでしょうか。しかし必ずしもそうとは言えないのが雑誌の面白いところなのです。

科学雑誌『Newton』は創刊号の前に0号が刊行されました。このように創刊号の前に発行される号は、「創刊準備号」、「0号」、「プレ創刊号」など雑誌によって様々な名称がありますが、創刊の宣伝や読者層・ニーズの把握など様々な目的で発行され、また、準備号と創刊号以後とでは見た目や内容、頒布方法など大きく異なる場合もあります。『Newton』では「創刊記念出版PREMIERE ISSUE」として0号が発行され、そのため、表紙を見比べると、創刊号で定価が表示されている場所に、0号では「会員特別配布版」と記載されていたり、表紙中央の数字が7（発行月の表記）ではなく0になっていたりと、その違いがわかります。

また、創刊号が必ずしも1巻1号通号1号となるわけでもありません。発行月＝号とする雑誌では、創刊号が1巻4・5号（4・5月合併号として創刊）のものや、会報が新たに雑誌として発行される際に前の巻次を引き継いだものなど、こちらも様々な理由で、様々に創刊号の巻次が付けられています。中でも『変革のアソシエ』は創刊号の次にNo.1が発行されました。編集後記を見ると、創刊後改めて内容の見直しを行った結果、巻号も仕切り直したという経緯があったことが分かります。

さらに、必ずしも創刊＝新しい雑誌がイチから始まるわけでもありません。例えば異なる2誌が合併して、新しいタイトルで新創刊される場合

写真７　『Newton』教育社（発行当時）　月刊　＜請求記号 Z14-894＞
左は昭和56（1981）年５月５日発行の０号、右は昭和56年７月７日発行の創刊号の表紙。どちらも「国立国会図書館デジタル化資料」（館内限定）でのご利用になります。

写真８　『生涯学習』文部科学省 編　国政情報センター　月刊
＜請求記号 Z71-V919＞
左は平成20年４月25日発行の創刊号の表紙。下は表紙右上にある巻号表示の部分を拡大したもの。

写真９　『変革のアソシエ』「変革のアソシエ」編集委員会 編　変革のアソシエ　季刊　＜請求記号 Z72-D499＞
左は2009年９月22日発行の創刊号、右は2010年１月20日発行の第１号の表紙。

や、雑誌の増刊が独立して創刊される場合もあります。『Ronza』の創刊準備号の表紙を見ると「週刊朝日増刊12月20日号」、またタイトルの下には「通巻4052号」と書いてあり、創刊準備号が『週刊朝日』増刊号として出版されたことが分かります。その後、創刊号はVol.1 No.1となりました。また、『ユリイカ』の表紙を見ると、創刊号と復刊1号の両方が見られます。これには個人出版で発行されていた『書肆ユリイカ』終刊後、この名前を引き継いで別の出版社が新たに創刊したという経緯があります。一般的にいうところの復刊とは異なりますが、このような雑誌もあるのです。

このように「創刊」と言ってもその背景や内容は実に様々、一言で「創刊」と片付けてしまうのはちょっともったいないと思いませんか？

写真10　『Ronza』朝日新聞社　月刊
＜請求記号 Z24-B125＞
左は1994年12月20日発行の創刊準備号の表紙。上は表紙のタイトルの下にある巻号表示の部分を拡大したもの。創刊準備号は、「国立国会図書館デジタル化資料」（館内限定）でのご利用になります。

写真11　『ユリイカ』青土社　月刊
＜請求記号 Z13-1137＞
右は1996年7月1日発行の創刊号の表紙。上は表紙の下側にある巻号表示の部分を拡大したもの。

2. 雑誌の改題 ■ 世相を反映して

雑誌が創刊された後、創刊当初のタイトルから、別のタイトルへと変わることを改題といいます。どのような事情で改題が行われているのか、いくつか事例をご紹介したいと思います。

まず、時代の流れを受けて改題した雑誌を見てみましょう。写真12と13をご覧ください。男女雇用機会均等法が1999年に改正されたことを受けて、「保母」は「保育士」と名称が変更されました。それに伴って雑誌名に「保母」の語が入っていた『保母養成研究』は『保育士養成研究』と改題されました。他にも『保健婦雑誌』が『保健師ジャーナル』に、『准看護婦資格試験』が『准看護師資格試験』に改題されています。

写真12　『保母養成研究』全国保母養成協議会編・刊　年刊
＜請求記号 Z6-B455＞
左は1999年3月31日に発行された第16号の表紙。『保母養成研究』というタイトルでの最終号。

写真13　『保育士養成研究』全国保育士養成協議会　年刊
＜請求記号 Z6-B455＞
右は2000年3月31日に発行された第17号の表紙。『保育士養成研究』というタイトルでの最初の号。第17号は、「国立国会図書館デジタル化資料」（館内限定）でのご利用になります。

つづいて、写真14と15をご覧ください。少子化による大学受験人口の減少や、女子学生の共学指向の影響を受けて、女子大学の共学化が進んでいます。共学化により大学名が変更されると、それに伴って大学名が入る雑誌も改題されます。「中京女子大学」は「至学館大学」と改称されましたので、『中京女子大学研究紀要』も『至学館大学研究紀要』と改題されました。同様に、『文京女子大学研究紀要』は『文京学院大学研究紀要』へと改題されています。

次は、改題することで、雑誌イメージの一新を図ったと思われる事例です。写真16と17をご覧ください。『週刊サンケイ』は1986年6月に『SPA!』と改題しました。『SPA!』の広告には「25歳から35歳までの、よく働きよく遊ぶ現在活躍形ビジネスマンに、そして、いわゆる女性週刊誌はもうたくさんというニュースマインドのある女性に、読んでほしいのです。」とあります。1980年代の雑誌創刊ブームの中、内容をリニューアルし、それに合わせ、イメージを一新するようなタイトルに改題されたようです。

大きさが変わり、表紙のデザインが変わり、タイトルもすっかり変わってしまい、並べてみてももはや同じ雑誌とは思えないほど様変わりをした改題もある一方で、タイトルの中の一文字のみの変更など、並べてみてもどこが変わったのか一目見ただけではわからないような改題もあります。

大きな改題も小さな改題も、その改題のきっかけとなった世相の動きに思いを馳せてみると、その雑誌がまた一段とおもしろいものに見えてくるのではないでしょうか。

次回は、分離・派生、合併とその他の変更です。

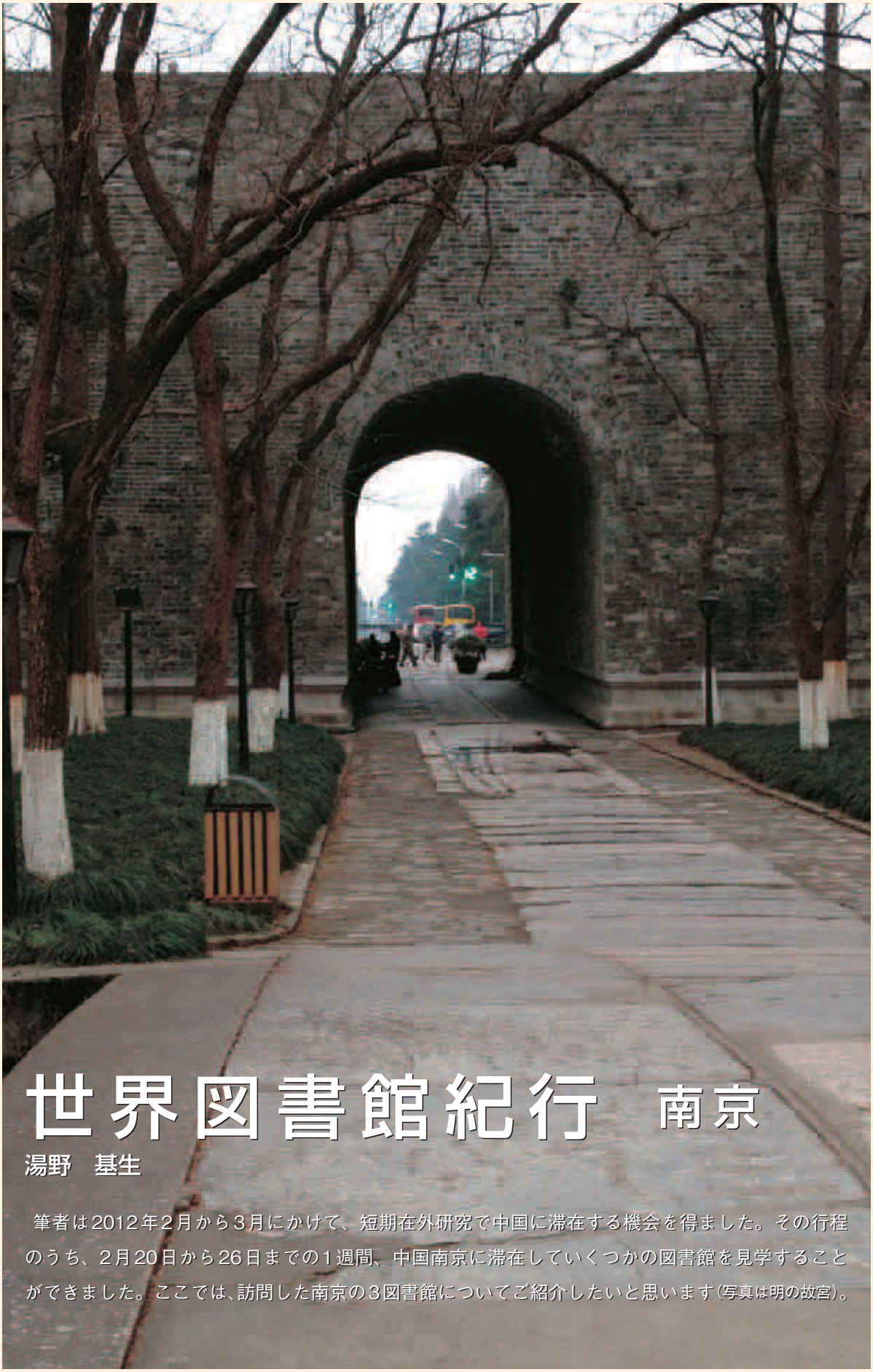
（利用者サービス部図書館資料整備課）

上左 写真14 『中京女子大学研究紀要』中京女子大学（大学院健康科学研究科・健康科学部・人文学部・短期大学部）編・刊　年刊　＜請求記号 Z22-661＞
2010年3月31日発行の第44号の表紙。『中京女子大学研究紀要』というタイトルでの最終号。

上右 写真15 『至学館大学研究紀要』至学館大学（大学院健康科学研究科・健康科学部・人文学部・短期大学部）編・刊　年刊　＜請求記号 Z22-661＞
2011年3月31日発行の第45号の表紙。『至学館大学研究紀要』というタイトルになって最初の号。

下左 写真16 『週刊サンケイ』　扶桑社 編・刊　週刊
＜請求記号 Z24-17＞
昭 和63年6月8日 発 行 の37巻21号 通 巻 2093号の表紙。『週刊サンケイ』というタイトルでの最終号。37巻21号は、「国立国会図書館デジタル化資料」（館内限定）でのご利用になります。

下右 写真17 『Spa!』　扶桑社 編・刊　週刊
＜請求記号 Z24-17＞
昭 和63年6月9日 発 行 の37巻22号 通 巻 2094号の表紙。『Spa!』というタイトルになって最初の号。



世界図書館紀行　南京

湯野　基生

筆者は2012年2月から3月にかけて、短期在外研究で中国に滞在する機会を得ました。その行程のうち、2月20日から26日までの1週間、中国南京に滞在していくつかの図書館を見学することができました。ここでは、訪問した南京の3図書館についてご紹介したいと思います(写真は明の故宮)。

■南京について

南京は江蘇省の省会（省政府所在地）で、人口は約800万人。江蘇省の西部にあたり、西は安徽省と接しています。江西省から北上してきた長江がこのあたりで東へ向きを変えて、江蘇省・上海市を経由して黄海に流れ込んでいきます。

『三国志』に登場する呉の孫権が都とした建業は南京の旧称のひとつであり、南京は一貫して中国南部の政治の中心地であり続けてきました。呉を滅ぼした晋が南遷して成立した東晋、その後に相次いで成立した宋・斉・梁・陳など南部に割拠した王朝がこの地に都を置いたことから「六朝古都」とも呼ばれます。明朝を興した朱元璋（洪武帝）もこの地に都を置きました。その後、第3代の永楽帝が北京に都を移した後も、南京は副都として宮殿や政府機構が置かれていました。清代には江寧と呼ばれ、最高位の地方長官である両江総督の役所が置かれていました。なお、いまでも南京の略称として「寧」という漢字が使われます。清代後半に太平天国が中国南部に拡大した時期には、首都として天京と改称されたこともあります。さらに中華民国の時代になってからも、南京が首都とされた時期がありました。1937年の南京事件は、日中関係史における重大事件としてよく知られています。

表　南京に都を置いた歴代王朝・政権

呉	建　業	（229-280年）
東晋	建　康	（317-420年）
宋	建　康	（420-479年）
斉	建　康	（479-502年）
梁	建　康	（502-557年）
陳	建　康	（557-589年）
南唐	江寧府	（937-975年）
明	応天府	（1368-1421年）
太平天国	天　京	（1853-1864年）
中華民国	南　京	（中華民国臨時政府1912年、国民政府1927-1949年）

※「南京历代建都表」『南京辞典』（方志出版社 2005年）p.777などから作成

今回訪問した図書館はいずれも長江南岸の市中心部に位置しています。この一帯には洪武帝や孫文の墓所（中山陵）など多くの観光名所がありますが、中華民国の大統領府であった総統府もそのひとつです（写真1）。清代以来の庭園が残っており、清代には両江総督の、太平天国期には天王洪秀全の役所でもありました。

総統府から東に少し足を延ばすと、梅園新村という地区に着きます。ここは国共内戦が始まる前に和平交渉が行われた場所です。1946年に中国共産党代表団の団長として、周恩来がこの地を訪れたことから、1998年に周恩来を記念した図書館が建てられています（写真2）。

写真1　総統府庭園

写真2　周恩来図書館

■ 南京図書館

今回の訪問先の一つである南京図書館は総統府に隣接した場所にあります。2010年に開通した南京の地下鉄2号線「大行宮」駅（清の乾隆帝が南方巡幸の際に南京での行宮が置かれたことにちなむ）から下車すぐです。

南京図書館は江蘇省の省級の公共図書館であり、約900万冊の蔵書数で、これは省級図書館の中では上海市立の上海図書館に次ぐ蔵書数です。古典籍160万冊、中華民国期の資料70万点も国内屈指です。職員数は約600人です。

南京が中華民国の首都であった頃に設置された国立中央図書館は南京図書館の前身のひとつであり、その蔵書の一部は、現在の南京図書館に引き継がれています。また、同じく蔵書の一部を継承した台湾の国家図書館との間で近年交流を行っています。当時の面影を伝える南京図書館旧館（写真3）は現在書庫となっており、将来は児童図書館としてリニューアルする構想もあるようです。

写真3　南京図書館旧館

南京図書館の前身は1907年に創立された江南

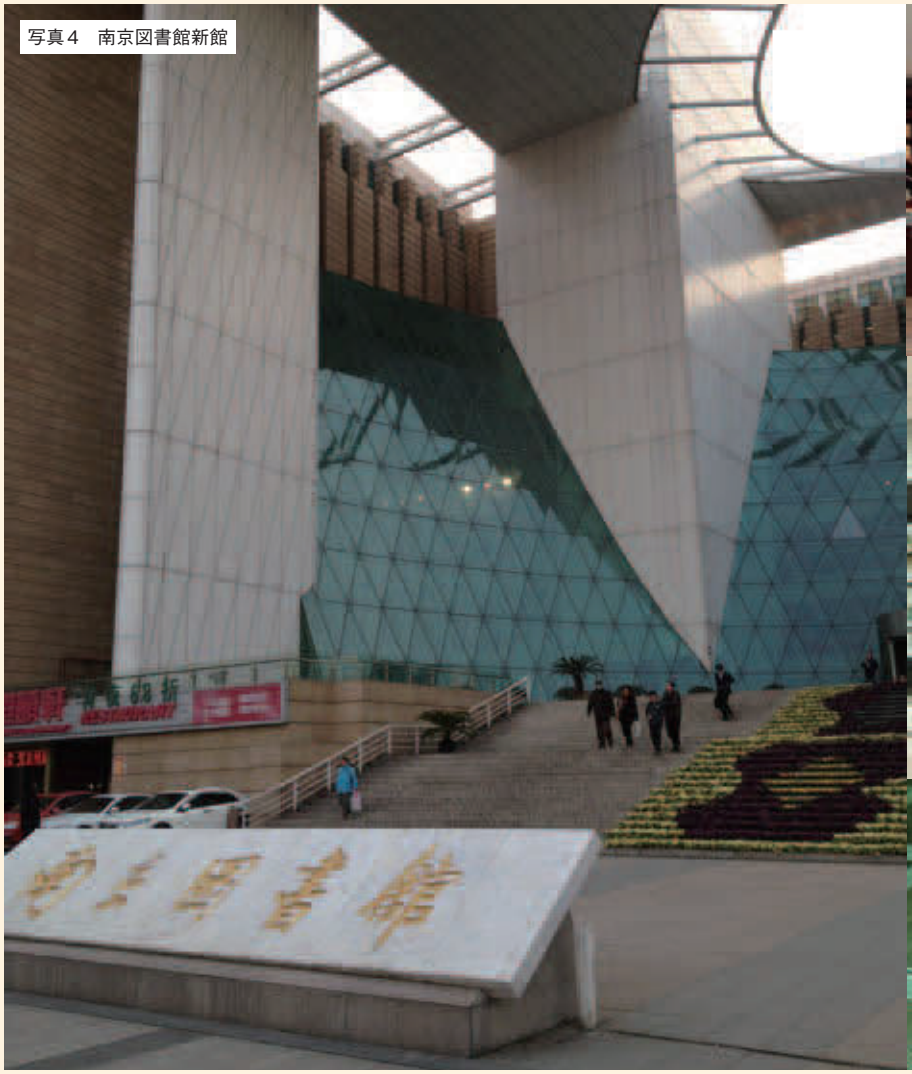


写真４　南京図書館新館

写真５　江蘇省著名人作家資料室

写真６　六朝遺跡展示スペース

写真７　六朝遺跡展示スペース

図書館にまでさかのぼることができます。江南図書館の創立から100周年に当たる2007年に今の場所にできた新館（**写真4**）は、敷地面積約25,000㎡、座席数は約3,000席、一日平均約8,000人の利用者が来館し、登録利用者は合計約44万人とのことです。

建物は9階建てで、階段を昇った正面入り口から入ったフロアは1階に当たります。正面に総合案内カウンターがあり、その奥には展示スペースがあります。そのほか、利用者登録受付のカウンターや、視覚障害者用資料室・児童資料室・江蘇省出身作家の著作を集めた資料室（**写真5**）などがあります。

2階から4階までは閲覧スペースです。5階はデジタル資源閲覧室と古典籍資料室があります。6階から7階は書庫で、8階が事務スペースです。

興味深かったのが、地下階にある「六朝遺跡展示スペース」です。実はこの新館は南朝梁の時代の宮殿の跡地に建てられており、発掘された遺跡の一部を展示スペースにして残しています（**写真6、7**）。

南京図書館では、貴重資料のデジタル化やデータベース化を中心に話を伺うことができました。南京図書館は清代以前の古典籍160万冊を所蔵し、そのなかには特に貴重とされる古典籍（善本）も約15,000タイトル（14万冊）含まれています。現在、中国では「中華古典籍保護計画」というプロジェクトをすすめており、その一環として、中国全土

で特に貴重な古典籍をリストアップして『国家貴重古典籍目録』を作成しています。南京図書館の所蔵古典籍からは363タイトルが選ばれています。これらの古典籍は優先的にデジタル化を進めていて、大部分が古典籍資料室内の端末から画像を閲覧できるようになっています。

そのほか「中華古典籍保護計画」に含まれるプロジェクトには、中国全土の機関等が所蔵する古典籍を網羅的に調査する「全国古典籍センサス」があります。南京図書館は江蘇省のセンターとして、省内各機関の所蔵状況のデータを取りまとめ、審査した上で国のセンター（国家図書館）に提出する役割を担っています。2012年2月の時点で、南京図書館では約3,400タイトルの古典籍データをセンサスに登録済みで、江蘇省全体の登録数は約10,000タイトルに達するとのことでした。

民国時期の国立中央図書館を前身とする南京図書館では、同時期の資料を大量に所蔵しています。さらにそれらを活用して資料デジタル化を行い、そのデータベースを作成しています。12万件の図版を収録する民国時期画像データベースを公開しているほか、建国初期の新聞の全文画像データベースも作成しているとのことです。

また、日本との関係でいえば、戦前に日本人が上海に設立した教育機関である東亜同文書院の旧蔵書（日本語）が南京図書館に所蔵されています。資料の状態があまり良くないこともあり、整理は進んでいないようですが、歴史文献部の方によれば、将来的にはデジタル化も視野に入れており、日本語資料でもあるので、日本の機関、特に日本の国立図書館である国立国会図書館の協力を歓迎するとのことでした。

■ 南京大学図書館

長江南岸の南京市内を南北に走る地下鉄1号線に「鼓楼」駅があります。ここには明代初期に建てられた城楼が現在も残っていますが、有名な大学が密集している地区でもあります。今回の滞在では、南京大学の図書館を訪問しました（写真8）。

中国の重点大学のひとつである南京大学は清代末期に成立した三江師範学堂を源流とし、中国国民党が創設した中央大学とアメリカの教会が創設

写真8　南京大学図書館

した金陵大学を併せて現在に至っています。図書館の正規職員数が約130名、蔵書数は約500万冊で、うち約40万冊が古典籍です。

南京大学図書館では、主に歴史文献のデータベース化・デジタル化の状況についてお話を伺うことができました。

中国全土の大学図書館が参加するコンソーシアムであるCALIS（中国高等教育文献保障系統）は、日本のNACSIS Webcatのような大学図書館所蔵資料の総合目録を提供していますが、学位論文や古典籍資料などについては専用の目録検索システムを公開しています。「学苑汲古：高等教育機関古文献データベース」は、大学図書館で所蔵している古典籍資料を検索するためのシステムです。現在、20を超える大学が参加していますが、南京大学は最初期からの参加館の一つであり、所蔵する古典籍40万冊のデータはほぼ全てこのシステムで検索可能であるとのことでした。

また、中国の大学図書館では、アメリカの図書館などと協力して、中国の古典籍など貴重資料を共同でデジタル化して相互利用しようというプロジェクトが行われており、CADAL（大学デジタル図書館国際協力計画）という名称で知られています。南京大学図書館はこのCADALが始動した第1期に積極的に参加し、古典籍10,000冊、中華民国期の図書27,000冊、雑誌8,000冊をデジタル化しました。しかしスキャンに伴う資料の破損が問題となったため、第2期ではこれらの資料のスキャニングは停止して、新式の設備を導入後に再開することを考えているとのことです。館内の作業場では、業者に委託して建国初期の欧文図書のデジタル化作業を行っていました。

なお、南京大学では鼓楼キャンパスから市東部にある仙林キャンパスへの移転を進めており、筆者が訪問した2012年2月下旬の時点で、間もなく古典籍資料の移転を始めるとのことでした。

■ 金陵図書館

最後に南京市の市立図書館である金陵図書館についてご紹介します。金陵とは南京の雅称であり、省立図書館も市立図書館も南京の名を冠していることになります。1980年に開館した旧館は南京図書館に近い場所にありましたが、2005年から新館の建設が始まり、2009年に開館しました。オリンピックスポーツセンター公園に隣接していて見晴らしがよく、地下鉄の「奥体中心」駅を降りると、すぐに全面ガラス張りの新館を見つけることができます（写真9、10）。

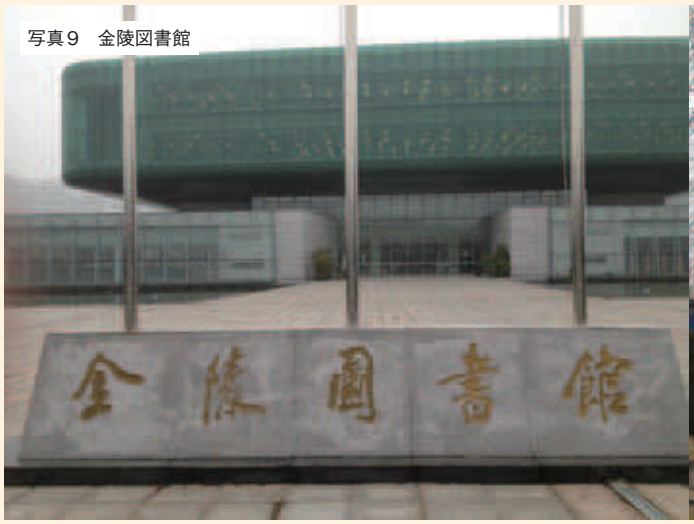


写真9　金陵図書館

写真10　金陵図書館 外観

写真11　英文児童図書室

写真12　南京中日交流の窓

敷地面積は約25,000㎡、座席数は約1,400席で、年間の利用者数は約190万人です。職員数は約100人、蔵書数約180万冊で、うち古典籍が約5万冊となっています。

1階には音楽の演奏会などもできる多目的ホールのほか、数百名収容できる会場が2つあります。音楽映像資料室や児童図書室もあり、アメリカの財団の協力により国内初の英文児童図書室（写真11）も付設されています。2階と3階には、通常の閲覧室のほか、芸術・デザイン関係の資料室や法律文献資料室などがあります。

4階には、南京の郷土文献・歴史資料室のほか、国際交流基金と共同で設立した日本語資料室「南京中日交流の窓」があり（写真12）、日本の漫画・DVDなどが開架してあります。この資料室は2009年の新館オープンとともに開設されましたが、蔵書は主に国際交流基金が毎年寄贈している日本語図書コレクションを基礎とするもので、そのほか、名古屋市立図書館などとの間で郷土資料などの交換を行なっています。

また、金陵図書館では南京に関する情報を調べるのに役立つ独自のデータベースを多数構築しています。とくに、南京市内の民国時期の建築物について検索できる「民国建築」データベースは、設計者・建築の経緯を詳細に解説したもので、図書館界から高い評価を受けているとのことでした。

以上、南京図書館・南京大学図書館・金陵図書館について簡単にご紹介しました。最後になりましたが、ご対応いただいた方々に感謝申し上げるとともに、日本の図書館界との交流がこれからも継続し発展していくことを祈ります。

（ゆの　もとお　関西館アジア情報課）

典拠でつながる情報検索の世界

図書館などで本を探すとき、著者の名前から探す人は多いのではないでしょうか。しかし、同姓同名でも別の人物であることがあります。また、人の名前には様々な表記があります。さらに、改姓したりペンネームを用いたりするなど、1人の著者が複数の名前で作品を書いているケースもあります。

ここで活躍するのが「典拠」です。国立国会図書館では、著者名、件名などの「典拠」を作成し、国内外に公開しています。ここでは著者名「典拠」を中心に、その役割や使い方についてご紹介します。

「典拠」とは？

図書館目録では、資料を検索する手掛かりとなる文字列や記号を「標目」といい、この標目は「典拠」を使って統制されています。例えば資料によって、「宮沢賢治」、「宮澤賢治」、「みやざわけんじ」、「Kenji Miyazawa」など表記の仕方が様々であっても、標目を「宮沢賢治」に統一すれば、名前の表記の仕方に関わらず、宮沢賢治の著作を検索したり、宮沢賢治をテーマに書かれた本を検索したりすることができます。

標目には著者を資料検索の手がかりとする「著者標目」や、資料に書かれているテーマ（主題）を手掛かりとする「件名標目」などがあります[1]。図書館目録における標目には、「見かけは同じだが実体は違うものを区別して」検索できる、また、「見かけは違うが実体は同じものをまとめて」検索できるという利点があります。こうした標目を支える仕組みが「典拠」なのです。

当館で作成・管理する著者名典拠ファイルは、著者標目（漢字形とその読み）、著者を同定・識別するためのデータ（生没年、職業、専攻など）、初出資料名、標目の形や読み等の根拠などに加え、固有の典拠IDをデータとして持っています。この典拠ファイルを基に標目を統制することで、「同名異人の識別」や「同一人物の集中」が可能となるのです。なお、著者には個人と団体が含まれます。

「同名異人の識別」は、その人（団体）の著作を同名異人（異団体）の著作と容易に識別できることであり、「同一人物の集中」は、資料にある著者の表記の様々な形をまとめること、さらに異なる名称の使い分けをひとつにまとめることです。

図1は標目の一例です。スポーツ選手、数学者、牧師などさまざまな同姓同名の著者が含まれています。著者名典拠を使わないで検索すると、求めている「鈴木一郎さん」の著作かどうか、自分で１件ずつ検索結果を確認しなければなりません。しかし著者名典拠を使うと、自分の求める人の作品を探すときに、他の同姓同名の著者の作品と区別して探すことができるのです。

図2は典拠データの一例です。ドイツの文豪であるGoetheには、日本語では「ゲーテ」、「ゲエテ」、「ギヨオテ」など、多様な表記があります。

「Goethe, Johann Wolfgang von, 1749-1832」という著者名「典拠」に、これらの多様な表記を参照形として記録しておくことで、同一人物としてひとつにまとめることができるのです。

また表記だけでなく、「アイザック・アシモフ／ポール・フレンチ」のように、同一人物の異なる名称を互いに関連づけることで、別名で書かれた作品へもスムーズに誘導できます。

このように典拠ファイルを通して「標目」を統制し、維持管理する仕組みを「典拠コントロール」と呼びます。

Web NDL Authoritiesの公開

当館では2010年6月からウェブ版の「国立国会図書館件名標目表（Web NDLSH）」を提供してきました[2]。そして2012年1月には、提供する典拠の範囲と機能を拡張した「国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス（Web NDL Authorities）」[3]の本格サービスを開始しました。

図1　同名異人の識別　どの人をお探しですか？
（Web NDL Authoritiesで「鈴木,一郎」を検索した結果一覧）

図2　同一人物の集中　「ギョエテとは俺のことかとゲーテ言い」（斎藤緑雨）
（Web NDL Authoritiesの画面。多様な表記は赤い線で囲んだ部分にあるように参照形として記録している）

1 件名については、本誌591（2010年6月）号 pp.4-9「主題検索のしくみ」を参照。
2 本誌591（2010年6月）号 pp.10-14「図書館の知識をウェブの世界へ」を参照。
3 http://id.ndl.go.jp/auth/ndla

普通件名典拠に加え、著者名典拠についてもウェブで提供しています。このサービスを利用することで、当館の典拠データ約110万件を検索・閲覧・ダウンロードすることができます。

例えば、人名でウェブを検索したとき、検索結果に同姓同名の別人が混在していたり、漢字形やローマ字形の表記の違いなどで、何度も検索語を変えて検索しなければいけなかったりといった苦労はありませんか？

Web NDL Authoritiesでは、提供するすべての典拠データは固有のURI[4]を持っています。これにリンクすることによって、特定の個人や団体をウェブ上で半永久的に識別することが可能となります。もし、ウェブで検索対象となるような名称等がすべてこの固有URIとリンクされていれば、図書館目録における標目を活用した場合のように効果的な検索が可能となり、前述のような苦労は解消されることでしょう。

さらに、Web NDL Authoritiesはセマンティック・ウェブに対応した、コンピュータ上で扱いやすい記述モデル（RDF）を採用することで、ウェブ上の様々なアプリケーションやシステムで活用できるようになっています。また、当館の統合検索サービスである「国立国会図書館サーチ」（以下、NDLサーチ）と連携した検索機能を実現していますので、ぜひご活用ください（図3）。

さらに、Wikipedia（日本語版）や海外機関のデータとも連携しています。このうち、2012年10月から当館が参加したVIAFについて、30頁から詳しくご紹介しましょう。

（収集書誌部収集・書誌調整課）

Web NDL Authoritiesで調べてみましょう！

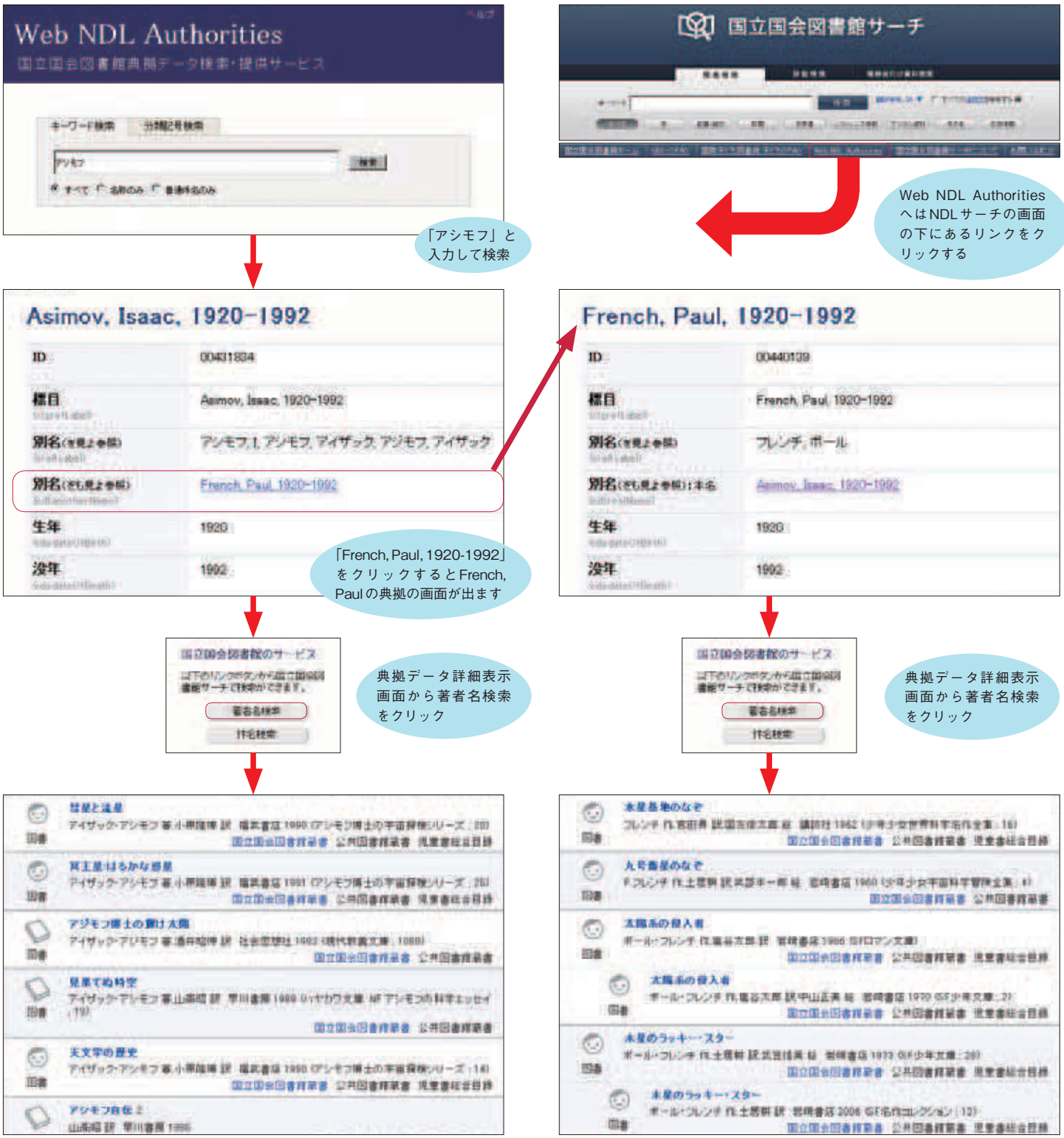
Q.この中で同じ人は誰と誰でしょう？

① スティーブン・キング
② 色川武大
③ コーネル・ウールリッチ
④ アントニイ・バークリー
⑤ 井上志摩夫
⑥ アリサ・クレイグ
⑦ フランシス・アイルズ
⑧ 中島梓
⑨ シャーロット・マクラウド
⑩ 北上次郎
⑪ 阿佐田哲也
⑫ 目黒考二
⑬ リチャード・バックマン
⑭ 栗本薫
⑮ ウィリアム・アイリッシュ

※本誌のどこかに答えがあります。

4 インターネット上に存在する情報資源の場所を指し示す記述方式（Uniform Resource Identifier）。ウェブサイトのアドレスをあらわすURLもURIに含まれる。

図3　Web NDL Authorities と NDL サーチが連携した検索機能



NDLサーチで「アイザック・アシモフ」の著作を検索した結果一覧画面
典拠の参照形に記録されているのでNDLサーチの検索結果一覧には「アシモフ」だけでなく、「アジモフ」という表記のものもあります。

NDLサーチで「ポール・フレンチ」の著作を検索した結果一覧画面
Web NDL Authorities で「アシモフ」と検索し、リンク等たどっていくとNDLサーチの「ポール・フレンチ」の著作一覧に到達します。

ことばの壁をこえる典拠
—バーチャル国際典拠ファイル（VIAF）への参加

2012年10月、国立国会図書館はVIAFに参加しました。これによって当館の典拠データは、国内だけでなく海外へも提供され、日本を代表する標準的データとしての役割を果たし始めています。

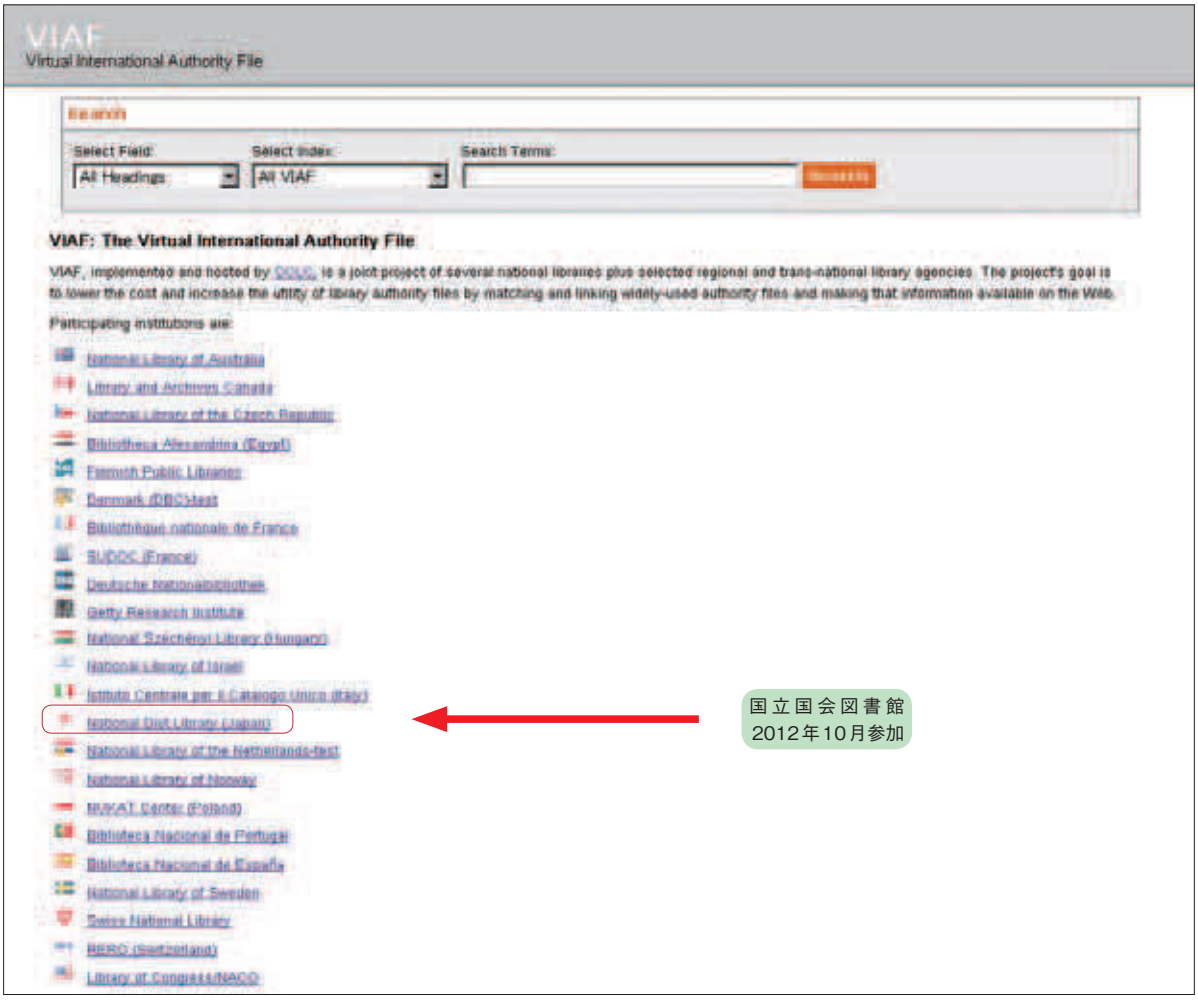


図1　VIAFのトップ画面（http://www.viaf.org）　VIAFの参加機関一覧になっている。

VIAFとは

VIAF（Virtual International Authority File）（図1）は、各国の国立図書館等から典拠データの提供を受けて、個人や団体といった同一の実体に対する典拠レコードを同定し、相互にリンクさせる事業です。VIAFでは、各機関の典拠レコードをひとつの形に統合するのではなく、各機関の各言語で作成された典拠レコードの標目形を維持しながら、ひとかたまりのレコード（クラスター）として提供しています。

VIAFの典拠データ

それでは、実際にVIAFに掲載されている典拠データを見てみましょう。作家の三島由紀夫の典拠レコードを例にとってご紹介いたします。

VIAFのトップ画面（図1）から「三島由紀夫」で検索する（図2）と、「三島,由紀夫,1925-1970」という日本語の典拠（図3）がヒットします。

詳細表示画面には、上部に各国の言語の標目形が表示され、VIAFで付与している固有のID（VIAF ID）（図3①）と、そのIDを利用した永続的識別子（Permalink）（図3②）が掲載されています。国旗などのアイコンは各国の国立図書館等VIAF参加機関を表しています。

画面中ほどには、アイコンと各機関の典拠データベースへのリンクが一覧となっています（図3③）。一覧のリンクにカーソルをあわせると、右のリンク図の下に当該機関の名称とその機関の典拠IDが表示されます（図4）。

図3　VIAFの「三島由紀夫」の典拠レコードの画面

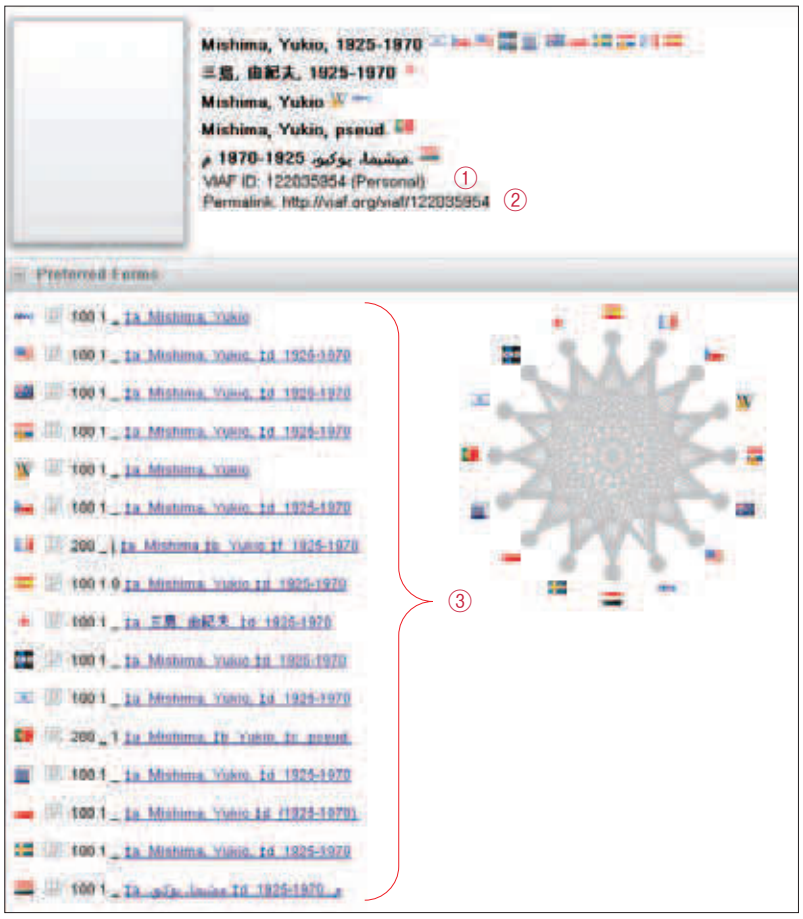
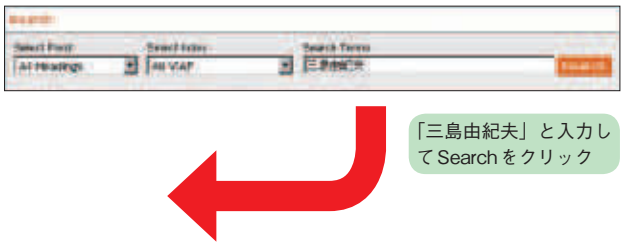


図2　VIAFトップ画面から検索



「三島由紀夫」と入力してSearchをクリック

図4　機関の名称と典拠IDの表示

例えば、図3③の中から「三島由紀夫」にカーソルをあわせると、国立国会図書館（National Diet Library）と国立国会図書館の典拠IDが表示されます（図4の赤い線で囲んだ部分）

日本の国旗のアイコンの横にあるリンクからは、当館のWeb NDL Authorities の「三島,由紀夫,1925-1970」の詳細表示画面（図6）につながっています。

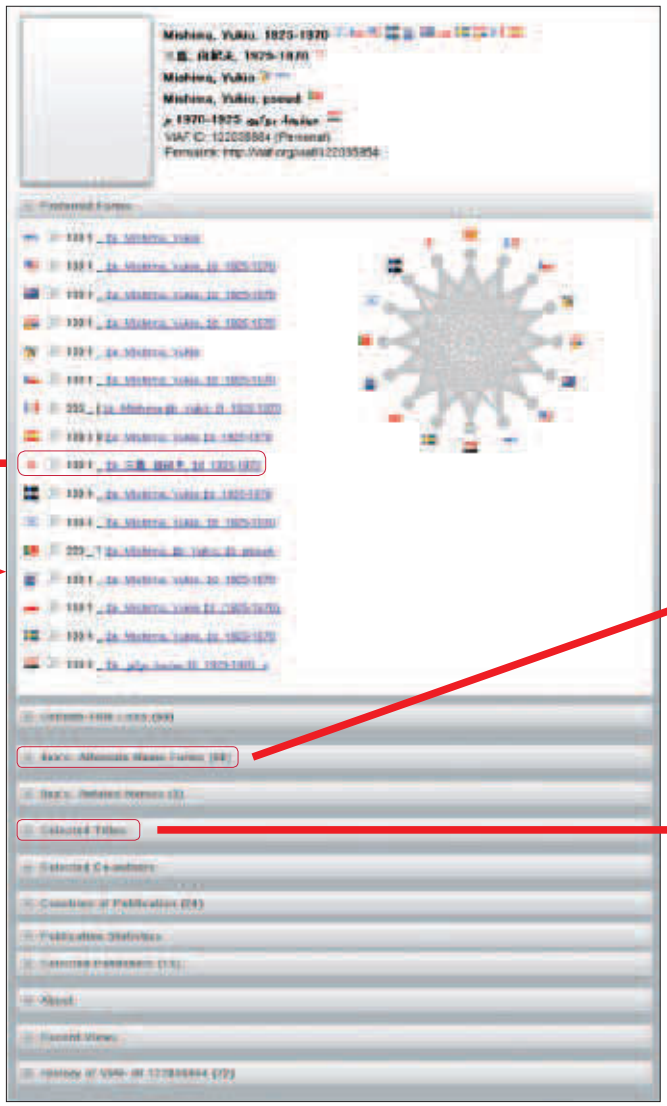
2012年12月からは、Web NDL Authoritiesの名称典拠レコードからもVIAF掲載の典拠レコードへリンクされるようになり、Web NDL AuthoritiesとVIAFの相互リンクが実現しています。

VIAF詳細表示画面では、「Мисима, Юкио」「يوكيو ميشيما」といった多様な参照形（図7）や、「Kinkakuji」など当該典拠にリンクしている書誌のタイトル（図8）、各国の出版状況や10年単位の

図5の「三島由紀夫」（赤い線で囲んだ部分）をクリックするとWeb NDL Authoritiesの「三島由紀夫」の典拠レコード画面（図6）に到達します。逆に図6の「関連リンク/出典」にあるリンク（緑色の線で囲んだ部分）をクリックするとVIAFの典拠レコード画面（図5）に到達します

図6　Web NDL Authoritiesの「三島由紀夫」の典拠レコードの画面

図5　VIAFの「三島由紀夫」の典拠レコードの画面（前頁図3と同じ）



書誌データ件数が分かる出版統計なども掲載されています。

VIAFの経緯

VIAFは、1998年から、米国議会図書館、ドイツ国立図書館、OCLC（Online Computer Library Center, Inc.）の3機関によりコンセプト検証が開始され、2007年に加入したフランス国立図書館をあわせた4機関が中心となって推進されてきたプロジェクトです。2012年4月にOCLCへ移管され、OCLCが提供するサービスの一つとなりました。OCLCとは、世界各国の大学や公共図書館、研究機関等で構成された非営利で会員制のライブラリーネットワークであり、世界最大の書誌ユーティリティ[1]です。2012年12月現在、VIAFには25か国から32機関が参加しています。また、まだテスト中ですが、Wikipedia（英語版）ともリンクしています。

VIAFが扱っているのは、個人名、団体名等の名称典拠データです。2012年12月現在、VIAFには約3383万件の典拠レコードが掲載されており、OCLCが月に1回の頻度でVIAFデータベースの更新を行っています。

2012年10月1日、当館はOCLCと協定を締結し、VIAFへ参加しました。当館からOCLCに提供した名称典拠データ（個人名、団体名、家族名、統一タイトル、地名、あわせて96万件以上）がVIAFを通じて利用可能になりました。2013年1月からは当館で日々新規に作成・更新しているデータを毎月送付しています。

図7

図5の「4xx's: Alternate Name Forms」をクリックすると多様な参照形が表示されます

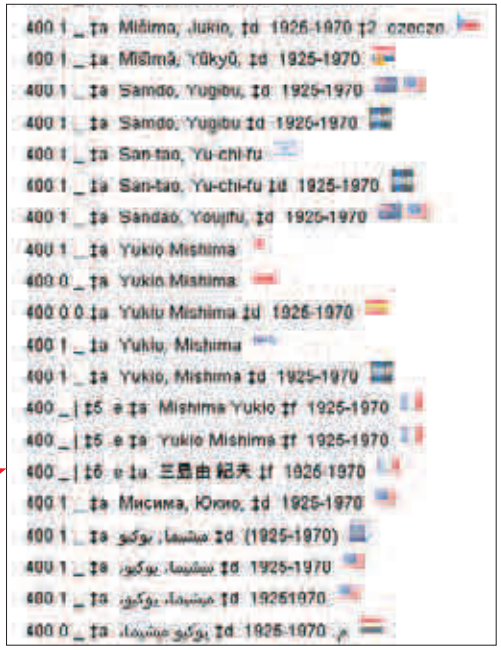


図8

図5の「Selected Titles」をクリックすると典拠にリンクされている資料タイトルの一覧が表示されます

1 多数の参加機関によるオンライン分担目録作業を目的として形成された組織で、総合目録の公開やデータベース提供などの機能を持つ。

VIAFの効果

書誌データを広く流通させることは、データ作成の省力化に貢献すると同時に、どこの機関・サービスでも同じように資料検索できるという効果を生みます。同様に、典拠データの流通によって、典拠の作成・維持作業の省力化や、標目の精度向上が期待できます。

VIAFを通して世界の書誌作成機関に当館の典拠データが利用されれば、世界中で日本人や日本の団体の著者の同定・識別がより容易になります。また反対に、当館もVIAFを通じて世界の各機関の典拠データを利用することで、上記の効果を得ることができるのです。

これまでは、各機関が作成・維持管理している典拠にアクセスするには、個々の機関の情報提供サービスを利用することが必要でしたが、VIAFにより、世界各国の誰もが使いやすい形で、典拠レコードを国際的に共有することが可能となり、典拠コントロールの成果が国際的に広がることとなりました。さらに、書誌作成の場面にとどまらず、VIAFを人名・団体名の検索ツールとして利用したり、VIAFに掲載されている典拠データのリンクをたどって、各機関の典拠に紐づく様々な言語版の作品を探したりすることもできます。

VIAF はセマンティック・ウェブに対応しています。MARCフォーマットの壁を超え、つまり図書館の伝統的なデータの持ち方にとらわれずに、図書館の所蔵資料だけでなくウェブ上のシステムや情報資源とのリンクが可能です。「典拠」や「図書館」を意識していない一般のウェブユーザも、いずれその効果を享受できるようになることでしょう。

国立国会図書館の役割

当館は2010年から、OCLCが維持管理する世界的な書誌データベースWorldCat[2]を通じて、当館が作成した和図書の書誌データJAPAN/MARCの国際的流通を促進してきました。このたび、VIAFを通じて当館作成の典拠データを提供することで、書誌データに加え典拠データについても、その国際的な流通を推進する役割を担うこととなりました。

当館がVIAFに正式に参加したことにより、VIAF評議会への参加やVIAFへの助言が可能となります。今後も典拠データの提供に係る国際的な調整へ積極的に参画し、当館にできる役割を果たして参ります。

（収集書誌部収集・書誌調整課）

＊VIAFの詳細については、NDL書誌情報ニュースレター（2012年4号）もあわせてご覧ください。
URL　http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/bib_newsletter/2012_4/article_02.html

2 http://www.oclc.org/worldcat/

A. 28ページ「Q.この中で同じ人は誰と誰でしょう？」の答え　①と⑬、②と⑤と⑪、③と⑮、④と⑦、⑥と⑨、⑧と⑭、⑩と⑫
あなたの好きな作家にも、実は意外な別名があるかも？いちどWeb NDL Authoritiesで調べてみてください。

本屋にない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、
日本国内の出版物を広く収集しています。
ここでは、主として取次店を通さない
国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

横浜華僑の記憶
横浜華僑口述歴史記録集

中華会館、横浜開港資料館編　中華会館刊
2010.10　175頁　26cm　　＜請求記号　DC851-J16＞

横浜で食事をすることになったとき、まず思い浮かぶ場所の一つは中華街ではないだろうか。広東、上海、四川、北京など様々な地域の料理店が並んでおり、入る店に迷うほどである。それら料理店の近辺に目をやると住居があり、そこに暮らしている人たち、華僑の人たちの生活を垣間見ることができる。

本書は、横浜に暮らす華僑の人たちの歴史をインタビューで掘り起こし、後世に伝えるための口述歴史記録である。「掘り起こす」と書いたのは、関東大震災と戦災により、横浜開港とともに歩んできた横浜華僑の人たちの生活や風習、当時の街並みなどに関する資料が散逸してしまったからである。このまま、貴重な歴史が埋もれてしまうことを危惧した横浜開港資料館が、横浜華僑華人史研究会に委託し、横浜華僑の高齢者に聞き取り調査を行った。本書では、そのうちの明治、大正生まれの11人の証言を収録している。インタビューでは、来日の時期や経緯、当時の横浜華僑の生活や風習、中華街の街並み、関東大震災や戦災の体験について、本人の記憶だけでなく両親や祖父母から伝え聞いたことなども交えて語っている。今も中華街に存在する店の、当時の様子などを知ることができ、大変に興味深い。

所々中国語の混ざる話し言葉が、ほぼそのまま記録されており、読んでいると彼らの声が耳元で聞こえてくるような気がするほど、リアルにインタビューの場の空気を感じることができる。彼らの職業は、中華料理店経営、骨とう品店経営、横浜中華学校教員、貿易商、塗装店経営など多岐にわたっている。インタビュアーの巧みな誘導によって、生立ちから学校時代のこと、関東大震災や戦災の困難、商売の苦労、そして戦後まで、11人それぞれに語られる歴史からは、様々な苦難を乗り越え、厳しい生活環境の中で強く生きてきた彼らのたくましさが伝わってくる。

また、本書には多数の写真が収載されている。証言した11人の幼少期や青年期の家族、住居、店などを写した個人写真のほか、横浜開港記念館で所蔵している当時の中華街の様子を写したものなど、貴重な写真を見ることができる。そのほか、巻頭には、平均80数歳の方々の記憶に基づいて作成された、1940年頃と1960年頃の中華街の詳細な「横浜中華街記憶地図」が付されており、冒頭カラーページでは当時の写真を交えつつ中華街の状況を解説している。

本書は、中華料理を味わう場所、中国文化を楽しむ場所という、今まで中華街に持っていた観光地としての印象に加え、華僑の人たちの生きてきた歴史や文化の息づく場所という新しい視点を教えてくれた。改めて中華街に足を運び、別の視点から中華街の魅力を味わってみたいと思わせる一冊である。

（電子情報部電子情報流通課　長崎（ながさき）　理絵（りえ））

＊入手のお問い合わせ　横浜開港資料館　045（201）2100
中華会館　045（663）2567

「満洲」の図書館
資料展示図録

岡村敬二編　京都ノートルダム女子大学人間文化研究科人間文化専攻刊　2010.3　32頁　30cm

＜請求記号 Y93-J4101＞

終戦時新京蔵書の行方
科学研究費補助金（基盤研究C）平成22年度成果課題 戦前期「外地」で活動した図書館員に関する総合的研究 資料展示図録

岡村敬二編　京都ノートルダム女子大学人間文化研究科人間文化専攻刊　2011.3　31頁　30cm

＜請求記号 Y93-J4149＞

『「満洲」の図書館』は、戦前から戦中にかけて満洲（現在の中国東北部、以下略）各地に存在した図書館をテーマにした、展示会の図録である。

満洲の図書館については、各方面で研究が行われてはいるものの、まだ不明な点も残されている。その中で、公共図書館での長年の実務経験をもつ研究者によるこの本には、とりわけ図書館への愛着が感じられる。「図書館や蔵書を媒介にして歴史の何者かを語ることが可能ではないか」という切り口で、満洲の概略および当時存在した日本人向け図書館、そして、当時の資料が所蔵されている現在の図書館の様子、という２章立てで、わかりやすくまとめられている。

第一の章では、図書館の外観を撮影した当時の絵葉書と、現在の写真とを、見比べることができる。建物が今なお現存し、図書館として使われているもの、銀行や博物館など異なる施設に転用されているもの、はたまた、近代的な建物に建て替わっているもの……など、さまざまである。

第二の章では、作者が各地の図書館を回りながら、終戦後の混乱期に散逸した、当時の図書館の蔵書を探し求めた記録が記されている。読み進めるうちに、実際に異国の図書館巡りをしている気分にさせてくれる。そして、多くの図書館で、閲覧や複写の制限はあるにせよ、分類に工夫を凝らしつつ、当時の日本語蔵書の一部が、今なお保管されていることが記されている。瀋陽、長春といった主要都市のみならず、吉林省辺境の延吉にまで蔵書を求めて足を延ばす作者の熱意には、頭が下がる思いである。巻末には、満鉄、国民党、解放軍……と様々な所有者を経て、たくさんの蔵書印が押された図書館資料の写真が掲載されている。激動の時代を生き延びた書物である。「資料を後世に遺す」という図書館の使命を、つくづく考えさせられてしまった。

『「満洲」の図書館』と同じ著者による『終戦時新京蔵書の行方』は、終戦前後の満洲国の首都・新京（現長春）を舞台とした、書物や文化財をめぐるできごとについて紹介したものである。終戦や引き揚げに関する文献は多い中、文化財とそれを守る人物にスポットを当てたものは珍しい。関係者の回想や手記、あるいは当時の地図をもとに、現地を訪ね、多くの写真を交えつつ解説している。

本書では最初に、当時、新京在住であった日本文学研究者・北小路健の『古文書の面白さ』からの引用を取り上げている。北小路の自宅が突如ソ連兵に接収され、貴重な蔵書が次々と庭に放り投げられ焼かれてしまう記述は生々しい。

続いて、日本本土との文化交流を企図して設置された「満日文化協会」の活動について触れている。1945年8月、同協会は驚くべきことに、ソ連参戦の混乱の真っ只中にもかかわらず、毎年恒例であった美術展の開催準備作業をしていた。「十日の昼頃に生花を美しく飾って準備を完了したが、この時たちまちに、関東軍や大使館・関東局等の家族の引き揚げ命令が来て」(『八十路 杉村勇造遺稿集』)といった、急変する事態に対応を追われた当時の状況を紹介している。

このほか、同協会のメンバーが終戦直後に「文化財処理委員会」を結成し、引揚者から譲り受けた美術工芸品を一堂に集め、中国当局に引き渡したエピソードにも言及している。内藤湖南や江上波夫も関わっていたといわれる、この満日文化協会については、作者の著書『日満文化協会の歴史』に詳しい。

本書も前掲書と同じく、ページ数は少ないものの、歴史的経緯や概略を俯瞰できるようになっている。写真や地図も充実しており、読みやすい。

満洲全般に関して言えば、当時実際に満洲に渡って働き、生活した人々による「よもやま話」の類の体験談・回顧録、あるいは同窓会や遺族会による会報や資料集が、数多く存在する。また、歴史研究者によって客観的視点から書かれた論文もまた、次々と発表されている。これらのすき間を埋めてゆくためにも、今回紹介した図録のような視点もまた、東北アジアの歴史の一側面を知る上で、参考になるのかもしれない。

引用されている回想録、出版物等

●北小路健 著『古文書の面白さ』新潮社 1984.11
＜請求記号 GB39-47＞

●杉村棟・杉村栄治 編『八十路 杉村勇造遺稿集』
杉村棟 1980 ＜当館未所蔵＞

●北村謙次郎 著『北辺慕情記』大学書房 1960
＜請求記号 915.9-Ki294h＞
「国立国会図書館デジタル化資料」でのご利用になります
(館内限定) http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1670211

●木山捷平 著『長春五馬路』筑摩書房 1968
＜請求記号 913.6-Ki3392t2＞
「国立国会図書館デジタル化資料」でのご利用になります
(館内限定) http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1363302

●三枝朝四郎 写真、江上波夫 責任編集『アジアの人間と遺跡 三枝朝四郎50年の写真記録』光村推古書院 1981.5
＜請求記号 GE91-70＞

●『満洲国美術展覧会図録 第1回』満日文化協会 1938
＜請求記号 K16-35＞
「国立国会図書館デジタル化資料」でのご利用になります
(館内限定) http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1904945

●『訪日宣詔紀念美術展覧会図録 第1回』満洲国通信社 1937
＜請求記号 K16-36＞
「国立国会図書館デジタル化資料」でのご利用になります
(館内限定) http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1904950

＊入手に関する連絡先
〒610－0351 京都府京田辺市大住ケ丘4－5－5 おおすみ書屋
郵便切手80円を同封し、郵送にてお申し込みください。

(利用者サービス部図書館資料整備課 山本(やまもと) 直樹(なおき))

平成24年度 レファレンス研修

平成24年11月15日～16日、東京本館において標記研修を開催した。この研修は、国内の図書館における中堅職員のレファレンス実務能力向上を図ることを目的として実施し、公共図書館、および大学図書館等から24名が参加した。

大庭一郎氏（筑波大学図書館情報メディア系講師）によるレファレンスサービスに関する概論の講義、および国立国会図書館職員（利用者サービス部人文課および科学技術・情報課）による人文科学分野および経済社会分野のレファレンス業務に関する講義を行った。

また、利用者サービス部科学技術・経済課の職員が講師となってパスファインダー作成に関するワークショップを行い、加えて大庭氏によるレファレンスサービスの研修計画の作成に関するワークショップを実施した。

講義資料の一部は、国立国会図書館ホームページ＞図書館員の方へ＞図書館員の研修＞平成24年度の研修＞平成24年度レファレンス研修　講義資料（http://www.ndl.go.jp/jp/library/training/material/1198767_1486.html）に掲載している。

平成24年度利用者アンケートの結果を公表しました

国立国会図書館は、サービスの利用動向や利用者の満足度・要望を把握するために、来館利用者を対象としたアンケートと、遠隔利用者（電子図書館サービスや遠隔複写サービスなど来館せずに利用できるサービスの利用者）を対象としたアンケートを毎年、交互に実施しています。

平成24年度は、遠隔利用者に対するアンケートを実施しました。アンケートの実施対象、実施方法等は次のとおりです。ご協力くださった皆様に厚くお礼申し上げます。平成24年度の利用者アンケートの結果は、ホームページでご覧になれます。アンケートの結果は、サービスの改善のために活用していきます。

種別	実施対象	実施期間	有効回答数	送付数（機関）	回収率
国立国会図書館ホームページアンケート＊1	遠隔利用者（個人）	6/25～9/28	914	―	―
図書館アンケート＊2	国内図書館・関係機関	7/17～8/17	985	1,297	75.9%

＊1　ホームページにアンケート入力フォームを用意し、回答者が画面上で回答するようにして行ったもの。

＊2　当館の遠隔複写サービスを利用している国内図書館・関係機関から抽出した1,297機関を対象に、郵送で行ったもの。

○URL　http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/enquete2012_01.html

国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）

＞国立国会図書館について＞利用者アンケート

＞平成24年度遠隔利用者アンケート結果

■ 東日本大震災アーカイブ公開記念シンポジウム「東日本大震災の記録をのこす意志、つたえる努力」

国立国会図書館は、3月に東日本大震災アーカイブを正式に公開する予定です。これに伴い、東日本大震災アーカイブをご紹介するシンポジウムを開催します。

シンポジウムでは、東日本大震災の記録等の保存、活用に関する基調講演に続き、記録収集・保存等の事例報告、パネルディスカッション等を予定しています。

○日　　時　　3月26日（火）14:00～17:00　（受付：13:30～）

○会　　場　　東京本館　新館講堂（定員250名）

関西館　第1研修室（定員60名　東京会場からのテレビ中継）

※インターネットで同時中継します。

（http://www.ustream.tv/channel/archive-sympo）

※シンポジウムに関する感想や情報をTwitterで交換される場合には、ハッシュタグ「#archive-sympo」（発言本文との間に半角スペースを忘れずに）をご利用ください。

○プログラム

【基調講演】

「記憶の刻印と風化」

山折哲雄氏（宗教学者）

【東日本大震災アーカイブの紹介】

高橋文昭氏（総務省情報流通行政局情報流通振興課長）

河合美穂

（国立国会図書館電子情報部電子情報サービス課次世代システム開発研究室長）

【記録収集・保存等の事例報告】

「被災地とともに、被災者に寄り添い、支援を続けるために」

青竹豊氏（日本生活協同組合連合会渉外広報本部本部長／執行役員）

「国際協力NGOの東日本大震災支援 ～記録の重要性と私たちの取組み～」

田島誠氏（国際協力NGOセンター震災タスクフォースチーフコーディネーター）

「新潟県長岡市における東日本大震災避難所資料の収集・保存」

田中洋史氏（長岡市立中央図書館文書資料室主任）

【パネルディスカッション】

コーディネーター

津田大介氏（ジャーナリスト／メディア・アクティビスト）

パネリスト

天野和彦氏（福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任准教授）

稲垣文彦氏（（社）中越防災安全推進機構復興デザインセンターセンター長）

稲葉洋子氏（帝塚山大学非常勤講師／前神戸大学附属図書館情報管理課長）

柴山明寛氏（東北大学災害科学国際研究所准教授）

○共　　催　　総務省

○参 加 費　　無料

○お申込方法

3月20日（水・祝）までに、次のいずれかの方法でお申し込みください。

定員に達した時点で受付を終了いたします。

［ホームページ］

参加申込みフォームからお申し込みください。

国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp）＞イベント・展示会情報＞2012年度のイベント＞東日本大震災アーカイブ公開記念シンポジウム「東日本大震災の記録をのこす意志、つたえる努力」

URL　http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/archive-sympo.html

［ファクシミリ］

次の事項を明記の上、下記FAX番号あてお申込みください。

①シンポジウム名（「3月26日シンポジウム申込み」）、②希望会場（東京本館または関西館）、③氏名（ふりがな）、④所属、⑤連絡先（FAX番号または電子メールアドレス）

○お申込み・お問い合わせ先

国立国会図書館 電子情報部 電子情報流通課 東日本大震災アーカイブ担当

FAX　03（3581）0768　　電話　03（3581）2331（代表）

※シンポジウムの詳細は上記ホームページをご覧ください。

国立国会図書館インターネット資料収集保存事業（WARP）をリニューアル公開しました

国立国会図書館は国立国会図書館法に基づき、国の機関や地方自治体、国公立大学等の公的機関のウェブサイトを網羅的に収集するほか、国際的・文化的なイベントや電子雑誌のウェブサイトも重点的に収集しています。

1月29日（火）に、国立国会図書館インターネット資料収集保存事業（WARP）をリニューアル公開しました。

新しいWARPにおける主な改善点は次のとおりです。より使いやすくなったWARPをどうぞご利用ください。

◆名称の変更とロゴマークの新設
旧称の「インターネット資料収集保存事業（ウェブサイト別）」から「インターネット資料収集保存事業」に変更し、略称WARP（Web Archiving Project）のロゴマークを新たに設けました。
◆検索画面の一新
検索画面をより使いやすくしました。また、地図等で視覚的にコレクションを一覧することができるようになりました。
◆ウェブアーカイブのわかりやすい紹介
ウェブサイトを収集する仕組みや世界各国のウェブアーカイブ事業について、わかりやすく紹介するコーナーを新設しました。

○国立国会図書館インターネット資料収集保存事業（WARP）

URL　http://warp.da.ndl.go.jp/（1月29日からリニューアル公開）

国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞電子図書館＞インターネット資料収集保存事業（WARP）

○お問い合わせ先

国立国会図書館 関西館 電子図書館課 ネットワーク情報第一係

電子メール　warp@ndl.go.jp

オンライン資料制度収集説明会（第2回）

7月1日から、文化財の蓄積およびその利用に資するため、納本制度に準じ、民間で出版されたオンライン資料（インターネット等を通じて発信される電子書籍、電子雑誌等）を国立国会図書館に納入することが義務付けられます。

納入の対象となるのは、当面、無償かつDRM（Digital Rights Management 技術的制限手段）のないオンライン資料です。例えば、インターネット上で無償で提供されている、年鑑、要覧、機関誌、調査報告書、事業報告書、学術論文、紀要、技報、ニュースレター、小説、実用書、児童書等が納入の対象です。

国立国会図書館では、オンライン資料の収集を関係各位のご理解のもとに進めてまいりたいと考えております。そこで、皆様のご理解、ご協力を賜るため、以下の要領で、出版者（インターネット等で無償かつDRMなしで電子書籍・電子雑誌等を公開し、または公開しようとしている方）等を対象とする説明会を開催いたします。なお、1月30日に開催した説明会（第1回）と内容は同じです。

○日　　時　4月17日（水）15:00～16:30（14:30開場）

○会　　場　東京本館　新館講堂（定員約300名）

関西館　第1研修室（定員約70名　東京会場からのテレビ中継）

○対　　象　出版者（インターネット等で無償かつDRMなしで電子書籍・電子雑誌等を公開し、または公開しようとしている方）等

○お申込方法

4月12日（金）17:00までに、参加申込みフォームからお申し込みください。定員に達した時点で受付を終了いたします。

国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞イベント・展示会情報＞オンライン資料制度収集説明会

URL　http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/online_seminar.html

○お問い合わせ先

国立国会図書館 電子情報部 電子情報企画課

電話　03（3581）2331（内線40110）

■ デジタル化資料活用研修会のご案内

国立国会図書館関西館では、図書館員等を主な対象として、当館が図書館等に提供するデジタルコンテンツに関する研修会を行います。平成24年度は、歴史的音源（※）をテーマとして開催します。研修会では、歴史的音源の活用方法を考えるほか、専門家から貴重な音源を御紹介いただきます。また、研修会終了後、歴史的音源を活用して開催している関西館小展示のフロアレクチャーを行います（希望者のみ、定員制）。多くの方のご参加をお待ちしています。

○日　時　　3月21日（木）　10：30～12：00
○会　場　　関西館　第1研修室
○お申込方法等　ホームページをご参照の上、3月19日（火）正午までにお申し込みください。
http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/1199284_1368.html
○お申込み・お問い合わせ先
国立国会図書館 関西館 電子図書館課 研究企画係
電子メール　ml-dlresearch@ndl.go.jp　　FAX　0774（94）9118

※ 1900年代初頭から1950年頃までに国内で製造されたSPレコード等に録音されている音楽・演説等。「国立国会図書館デジタル化資料」（http://dl.ndl.go.jp）で提供中です。一部はインターネット上でもご利用いただけます。

■ 平成24年度図書館及び図書館情報学に関する調査研究「日本の図書館におけるレファレンスサービスの課題と展望」報告会

国立国会図書館関西館図書館協力課では、平成24年度の図書館及び図書館情報学に関する調査研究「日本の図書館におけるレファレンスサービスの課題と展望」を実施しました。この調査の結果について、1月31日（木）に実施しました中間報告会に続き、最終報告会を開催します。入場は無料です。

○日　時　　3月21日（木）　13：30～17：30
○会　場　　関西館　大会議室
○対　象　　図書館の情報サービス（レファレンスサービス）に関心のある図書館員・図書館情報学研究者等

○お申込方法等　ホームページをご参照の上、3月15日（金）までにお申し込みください。

http://current.ndl.go.jp/node/22837

○お申込み・お問い合わせ先

株式会社シィー・ディー・アイ「レファレンスサービス調査」係

（担当：半田・岡本・箕輪）

電子メール　ndlenq2012@cdij.org　　FAX　075（253）0661

■ 第9回レファレンス協同データベース事業フォーラム

レファレンス協同データベース事業に関する意見交換・相互交流の場として、レファレンス協同データベース事業フォーラムを開催します。

北川正恭氏（早稲田大学大学院教授）による基調講演のほか、「社会を創る図書館の力 ― レファレンスサービスの今を知り、未来を語る」をテーマにディスカッション等を行います。入場は無料です。どうぞご参加ください。

○日　時　3月22日（金）　10：30～16：00

○会　場　関西館　大会議室

○主な対象　事業参加館および当事業に関心のある方

○お申込方法等　ホームページをご参照の上、3月15日（金）までにお申し込みください。

http://crd.ndl.go.jp/jp/library/forum_9.html

○お申込み・お問い合わせ先

国立国会図書館 関西館 図書館協力課 協力ネットワーク係

電子メール　info-crd@ndl.go.jp　　FAX　0774（94）9117

関西館小展示（第13回）「花ひらく少女歌劇の世界」

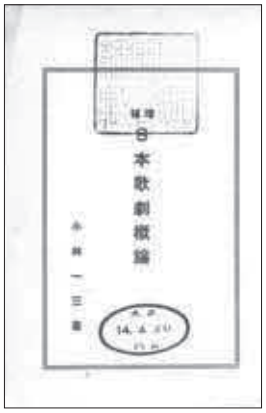
第13回の関西館小展示では、「花ひらく少女歌劇の世界」と題して、少女歌劇に関する資料を紹介します。

少女歌劇とは、女性のみで演じられるミュージカルやレビューなどの舞台であり、昭和初期に隆盛した日本独特の演劇形態です。大正期に関西で宝塚、大阪松竹等の少女歌劇団が人気を博すると、昭和戦前期には観光地や沿線開発の目玉として、各地で歌劇団結成の動きが広まりました。

今回の展示では、当時の歌劇団の活動や公演内容を中心に少女歌劇の発展史をたどります。各歌劇団の年史、脚本、写真集等の関西館所蔵資料を展示するとともに、「すみれの花咲く頃」（宝塚歌劇団）、「東京をどり」（松竹少女歌劇団）をはじめとする公演主題歌などの歴史的音源37点を聴くことのできるコーナーを設けます。

開催期間中には資料解説も行います。開催日時は、国立国会図書館ホームページ＞イベント・展示会情報＞関西館小展示「花ひらく少女歌劇の世界」（http://www.ndl.go.jp/jp/event/exhibitions/1199016_1376.html）をご覧ください。

○開催期間　2月21日（木）～　3月22日（金）（日曜・祝日を除く）
○開催時間　10:00～18:00
○会　　場　関西館　総合閲覧室
○入　　場　無料



『日本歌劇概論　補3版』
（宝塚少女歌劇団　1925）

『ムーランルージュカーニヴァル：赤玉少女歌劇特別公演』
（赤玉少女歌劇団　1935）

『大大阪画報』
（大大阪画報社　1928）

国際子ども図書館展示会「日本の子どもの文学ー国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」のご案内

国際子ども図書館では「日本の子どもの文学ー国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」と題し、国際子ども図書館が所蔵する本、絵本や雑誌の中から、明治から現代に至るまでの時代を彩った児童文学作品を取り上げ紹介する、長期の展示会を行っています。日本の児童文学の通史にそった展示のほかに、子どもが文学作品に接するひとつの機会である教科書とその掲載作品、童謡を展示しています。

また、児童文学者コーナーを設け、著名な児童文学者の作品を半年ごとに入れ替えながら、展示しています。2月26日から8月18日までは、新美南吉の作品と業績を紹介します。

「ごんぎつね」「手ぶくろを買いに」など、29歳で亡くなった新美南吉の童話は、今も多くの人々に愛され、長く読み継がれています。平成25年は新美南吉の生誕100周年に当たります。この展示会が、南吉が何を語り、私たちが何を読みとってきたのかを考える機会になれば幸いです。

○開催期間	現在、開催中。 児童文学者コーナー第5回新美南吉は、2月26日（火）～8月18日（日） ※月曜日、国民の祝日・休日、第3水曜日を除く。
○開催時間	9:30～17:00
○会　　場	国際子ども図書館　本のミュージアム（3階）
○入　　場	無料

○お問い合わせ先
国立国会図書館 国際子ども図書館 企画協力課
電話　03（3827）2053（代表）

＊平成24年10月に、これまでの展示資料のカラー写真と解説を掲載した展示解説本「日本の子どもの文学ー国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」を刊行しました。展示解説本の詳細や入手先については、本誌48ページをご覧ください。

新刊案内
国立国会図書館の編集・刊行物

レファレンス　744号　A4　132頁　月刊　1,050円　発売　日本図書館協会

・平成25年の年頭に際して

・教職員のメンタルヘルスの現状と課題

・我が国における起業活動の現状と政策対応

・「国会会議録」前史（資料）

・敗戦直後の戦争調査会について（資料）

・国際競争力ランキングから見た我が国と主要国の強みと弱み（資料）

カレントアウェアネス　314号　A4　28頁　季刊　420円　発売　日本図書館協会

小特集：マンガ図書館の現在

・動き出した北九州市漫画ミュージアム

・京都国際マンガミュージアムの現在

・米沢嘉博記念図書館の現在

・広島市まんが図書館の現状と課題について

・イタリアの“パブリック・ライブラリー”の現状と課題

＜動向レビュー＞

・図書館におけるナレッジベース活用の拡がりとKBARTの役割

・Europeanaの動向：「欧州アイデンティティ」および「創造性」の観点から

・中国の納本制度の現状と新たな動き

日本の子どもの文学ー国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み

A4　80頁　1,500円　発売　山越　（ISBN　978-4-87582-740-5）

国際子ども図書館で開催中の展示会の解説本。明治から現代にいたる絵本や絵雑誌約300点の展示資料の説明をカラー写真とともに掲載している。また、展示会関連行事として開催した神宮輝夫氏、谷川俊太郎氏と展示会監修者の宮川健郎氏との対談2編と児童文学関連年表等を収録。

入手のお問い合わせ

日本図書館協会　〒104-0033　東京都中央区新川1-11-14　電話 03（3523）0812

山越　〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷3-12-18　電話 03（5413）7778

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN

No.623 2 February 2013

CONTENTS

02 <Book of the month - from NDL collections>
Kōjō jissokuzu : Imperial Palace in the beginning of the Meiji period

04 Marking the 10th Anniversary of the Kansai-kan (2)

05 My experience of visiting libraries
Development of a linked perspective guided by historical materials－Lecture by Prof. Shinichi Yamamuro

14 The serial column: Various changes in periodicals
1. Birth of new magazines
2. Title change

19 Travel writing on world libraries: Nanjing

26 World of information search connected by authority record

30 Authority record transcending the language barrier
The NDL joined in Virtual International Authority File (VIAF)

13 <Tidbits of information on NDL>
General Information Desk: Treasure every encounter, for it will never come again.

35 <Books not commercially available>
○ *Yokohama kakyō no kioku : Yokohama kakyō kōjutsu rekishi kirokushū*
○ *"Manshū" no toshokan : shiryō tenji zuroku*
○ *Shūsenji shinkyō zōsho no yukue : kagaku kenkyūhi hojokin (kiban kenkyū C) Heisei 22-nendo seika kadai senzenki "gaichi" de katsudōshita tosyokan'in ni kansuru sōgōteki kenkyū : siryō tenji zuroku*

38 <NDL News>
○ Reference training program FY2012

39 <Announcements>
○ Results of the user questionnaire survey FY 2012 now available on the NDL website
○ Symposium commemorating official launch of the Great East Japan Earthquake Archive: The records, the will to preserve them and the effort to hand them down to the future generations
○ Renewal of the National Diet Library Web Archiving Project (WARP)
○ Briefing session on e-legal deposit of online publication (2)
○ Training program on the NDL digitized contents
○ Debriefing session of FY2012 Research project on libraries, and library and information science research "Challenges and future vision of reference services in libraries in Japan"
○ 9th forum on the Collaborative Reference Database Project
○ Small exhibition in the Kansai-kan (13) "Flowering world of the all-girl revue"
○ Japanese Children's Literature: A history from the International Library of Children's Literature Collections
○ Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

平成25年2月号（No.623）
平成25年2月20日発行　定価525円
（本体500円）

発行所　国立国会図書館
編集責任者　田中久徳
〒100-8924　東京都千代田区永田町1-10-1
電話　03（3581）2331（代表）
FAX　03（3597）5617
E-mail　geppo@ndl.go.jp

発売　社団法人日本図書館協会
〒104-0033　東京都中央区新川1-11-14
電話　03（3523）0812（販売）
FAX　03（3523）0842
E-mail　hanbai@jla.or.jp

印刷所　株式会社 正文社印刷所

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞刊行物＞国立国会図書館月報でご覧いただけます。

表紙・本文　中性再生紙使用

「生写四十八鷹　うぐひす 白梅」
嵩岳堂画　紅英堂　［安政６（1859）］
１枚　36.0×24.5cm
（『生うつし四十八鷹』<請求記号　寄別7-8-2-3>所収）

国立国会図書館月報

平成25年2月20日発行（毎月1回20日発行 2月号 通巻623号）

発売：社団法人 日本図書館協会　定価525円（本体500円）

雑誌 03919-02

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。